

沖縄県文化財調査報告書第13集

八重山石垣島

さおわかひがし

# 竿若東遺跡緊急発掘調査報告

1978年3月

沖縄県教育委員会

沖縄県文化財調査報告書第13集

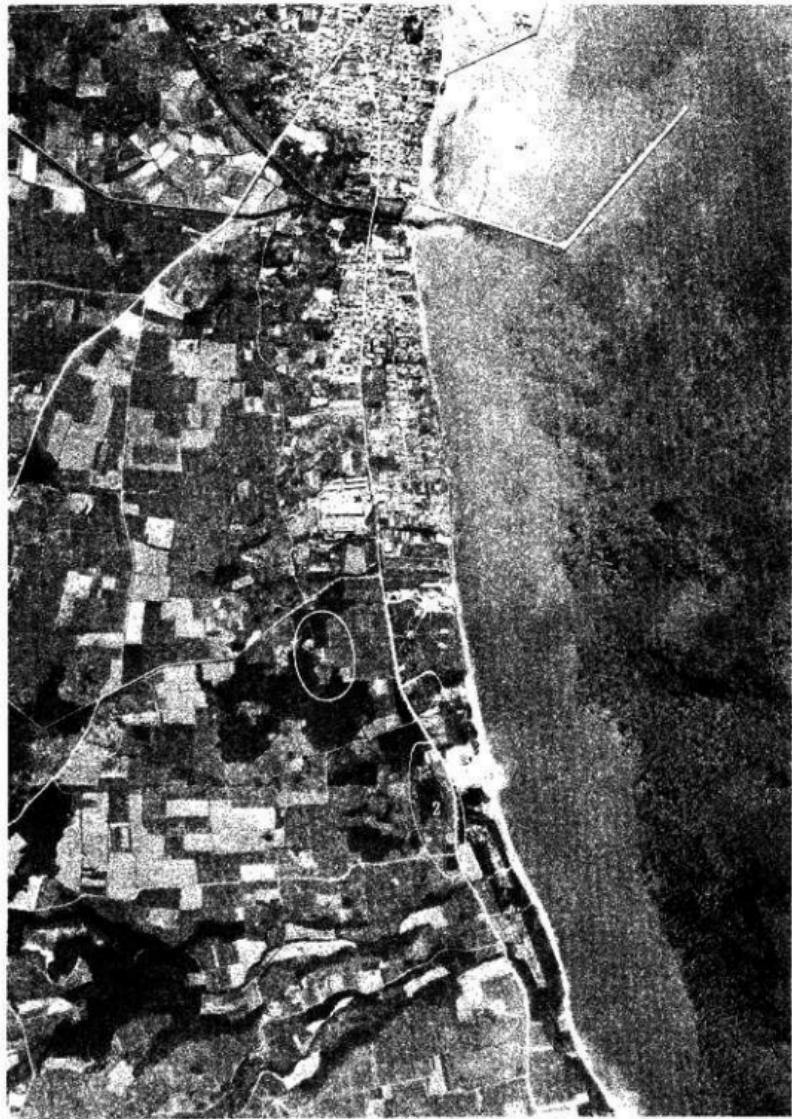
八重山石垣島

さおわかひがし

# 竿若東遺跡緊急発掘調査報告

1978年3月

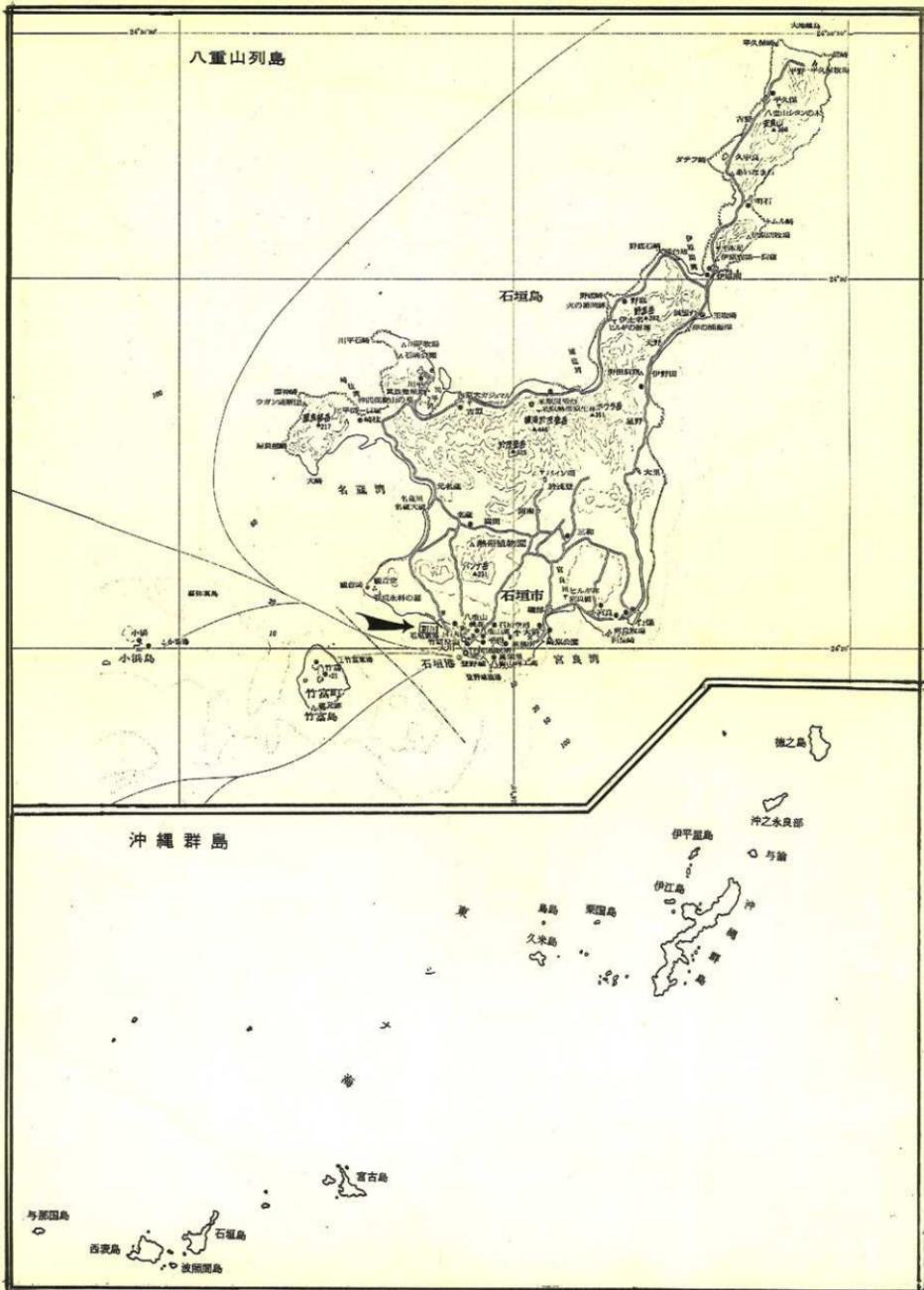
沖縄県教育委員会



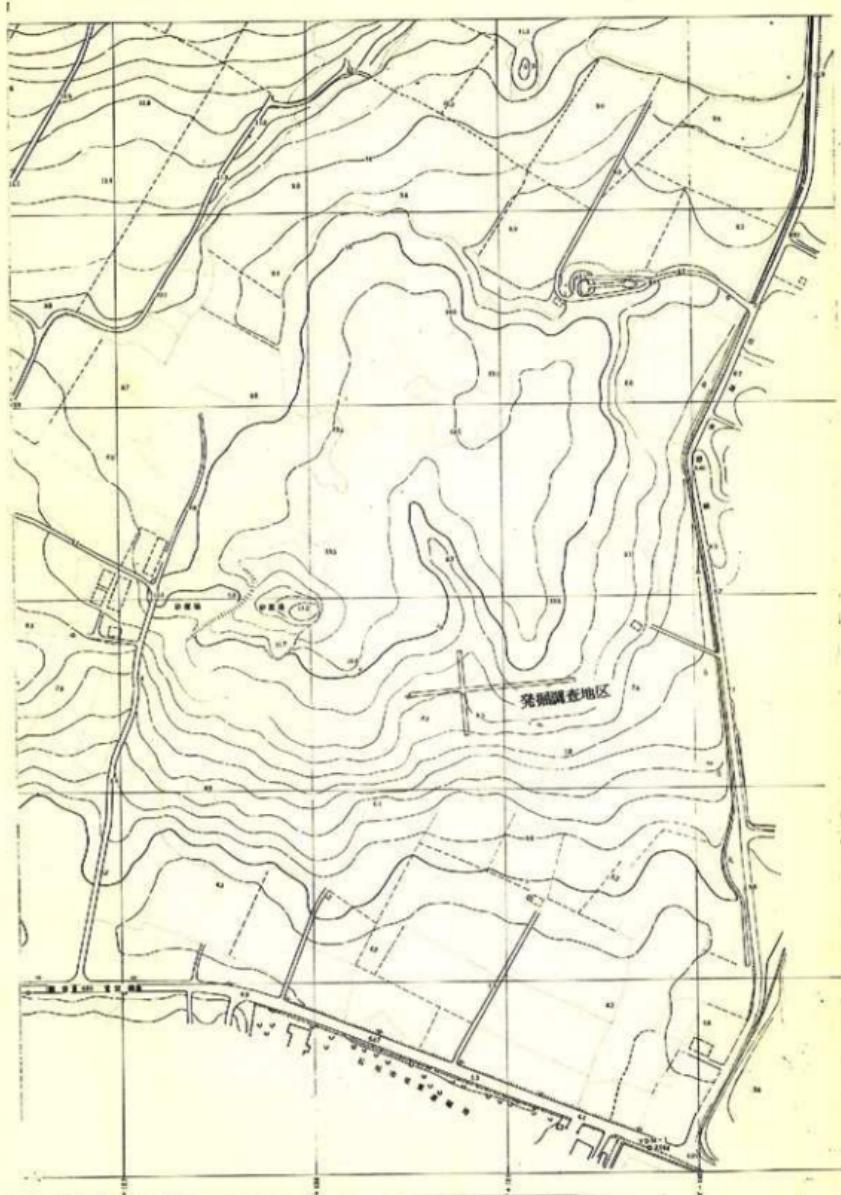
卷頭図版 ( 竿若東遺跡全景航空写真 )

Y 12,500 共同航空提携

1. 竿若東遺跡
2. 竿若遺跡



第1図 石垣島の位置と地形



第2図 石垣市新川地区地形図

# 目 次

はじめに	.....	1
I 調査に至るまでの経過	.....	3
II 調査の経過	.....	6
III 遺跡の位置と環境	.....	7
IV 調査の概要	.....	9
1. 調査の概要	.....	9
2. 遺跡の状態	.....	10
V 遺跡の内容	.....	13
1. 遺構	.....	13
2. 遺物	.....	14
(1) 中国製青磁	.....	14
(2) 白磁	.....	19
(3) 染付	.....	21
(4) 黒褐釉陶器	.....	22
(5) 須恵器	.....	26
(6) キセルの雁首	.....	26
(7) 鍤	.....	26
(8) その他	.....	27
(9) 土器	.....	27
(10) 石器	.....	29
(11) 牙製品	.....	30
(12) 自然遺物	.....	31
VI おわりに	.....	36
(付1) 崖葬墓(洞穴囲い込み墓)	.....	93

## 掲 図 目 次

第1図	石垣島の位置と地形	
第2図	石垣市新川地区地形図	
第3図	発掘調査地区設定図	8
第4図	畑地区、完掘平面測量図	12
第5図	青磁器(Ⅰa類, Ⅱa類)実測図	39
第6図	青磁器(Ⅱa類)実測図	40
第7図	青磁器(Ⅱa類)実測図	41
第8図	青磁器(Ⅱb類, Ⅲ類, Ⅵ類)実測図	42
第9図	青磁器(Ⅱb類, Ⅲ類, Ⅳ類, Ⅴ類)実測図	43
第10図	白磁器(Ⅰ類)実測図	44
第11図	白磁器(Ⅱ類, Ⅲ類, Ⅳ類, Ⅴ類)染付実測図	45
第12図	陶器実測図	46
第13図	陶器実測図及び拓影	47
第14図	陶器実測図及び拓影	48
第15図	陶器実測図及び拓影	49
第16図	陶器(指鉢)拓影	50
第17図	陶器(指鉢)拓影	51
第18図	陶器, 須恵器実測図及び拓影	52
第19図	土器実測図及び拓影	53
第20図	土器実測図	54
第21図	土器, 品製品実測図	55
第22図	石器実測図	56
第23図	石器実測図	57
第24図	石器実測図	58
第25図	石器実測図	59

## 図 版 目 次

図版 1	上・遺跡全景(南から) .....	60
	下・遺跡全景(北から), 遠望されるのは竹富島 .....	60
図版 2	上・下・石灰岩微高地の様相(東地区) .....	61
図版 3	上・西地区近景 .....	62
	下・西地区発掘完了グリットの様相 .....	62
図版 4	上・東地区発掘完了グリットの様相 .....	63
	下・東地区北壁断面 .....	63
図版 5	上・畠地区, 発掘前の様相 .....	64
	下・畠地区, 発掘後の様相 .....	64
図版 6	上・畠地区, 発掘状況 .....	65
	下・畠地区, 柱穴の様相 .....	65
図版 7	上・調査を待たず消滅した畠地区 .....	66
	下・消滅した竿若東遺跡(南から遠望) .....	66
図版 8	青磁器 .....	67
図版 9	青磁器 .....	68
図版 10	青磁器 .....	69
図版 11	青磁器 .....	70
図版 12	白磁器・染付 .....	71
図版 13	白磁器 .....	72
図版 14	白磁器・染付 .....	73
図版 15	白磁器 .....	74
図版 16	陶器 .....	75
図版 17	陶器 .....	76
図版 18	陶器 .....	77
図版 19	陶器 .....	78
図版 20	陶器 .....	79
図版 21	陶器 .....	80
図版 22	陶器 .....	81
図版 23	陶器 .....	82
図版 24	陶器 .....	83
図版 25	陶器・貝製品・染付 .....	84

図版 26	菅 鉢	.....	85
図版 27	陶 器・指 鉢	.....	86
図版 28	須恵器	.....	87
図版 29	土 器	.....	88
図版 30	土 器	.....	89
図版 31	土 器	.....	90
図版 32	石 器	.....	91
図版 33	石 器	.....	92
図版 34	上・石灰岩凹地の様相	.....	94
	下・第一号墓	.....	94
図版 35	上・第二号墓	.....	95
	下・第三、四号墓	.....	95
図版 36	上・第二号墓(近景)	.....	96
	下・第三号墓(近景)	.....	96
図版 37	上・第四号墓(近景)	.....	97
	下・第四号墓出土の妻棺	.....	97

## はじめに

竿若東遺跡は、官良川土地改良事業の一環としての新川地区圃場整備事業の工事の際に、県文化財保護指導委員（パトロール員）によって発見された遺跡である。

本文に記すように、当時圃場整備事業計画の中で、文化財保護当局との協議調整に、きわめて不十分な点があり、発見後においても、さらにその扱いをめぐって難航した。

結局、県教育委員会による発掘調査事業として、とり組まれることになったのであるが、今後は、農政側と文化財保護当局との緊密な協議、調整が必要であろう。

遺跡は、その所在地が小字（原）「竿若」（ソーバガー）内の東端にあたることから、「竿若東遺跡」と名付けることとした。これは、その西側にある無土器時代の遺跡、「竿若遺跡」との混同をさけるためである。

この一帯は、「フクンバル」とも通称されているが、これは口承であり、公図との混同や将来消滅の恐れもあることから、遺跡名としては適切でないと考えた。

また、著名な考古学者、鳥居龍藏氏の著書の中に、『四ヶ村の西端の遺跡』として、次のように記されている。

「四ヶ村の西端、海岸に接した第三紀珊瑚礁層の上、四ヶ村の方よりせば、左側の路傍に一大貝塚がある。こは、すでに貝殻を以て貝塚を集積して居る……以下略」

この記事は、新川一帯のどこかに遺跡が存在することを示しているが、「四ヶ村の西端の遺跡」は、漠然としており、判断にむずかしい。しかも、時期的な差異を示す二、三の遺跡が近くに存在することも事実である。

文献と現地とを結びつけるには、それだけの科学的な手続きを経る必要があり、今のところ両者を関連づけるだけの論拠に乏しい。したがって、当面、「竿若東遺跡」が最も妥当を呼称と言えよう。

竿若東遺跡の発掘調査は、1977年12月5日より、1978年1月15日までの期間実施された。調査の結果、遺跡地は海岸の砂丘地から、ゆるやかに高くなってくる、標高10.5mの琉球石灰岩微高地に限られて存在することがわかった。また、遺跡地のすべてが以前の耕作等によって搅乱されており、保存状態はあまり良好ではなかた。その結果、調査終了後遺跡地城はすべて、圃場整備事業地として削平され消滅した。

出土遺物は殆んど細片で、本来の状態を残すものはあまり得られていない。

細片で良好な包含層が残されていない状況から、遺跡の年代を判断することは困難であるが、出土した陶磁器類、その他の状況から判断すると、本遺跡は18~160と

いう幅の広い時期にわたる遺物を含んでおり、時期的にも石垣島における他の集落遺跡の中でも古くなるものと見られている。

地元産の外耳土器、石器、外国製（中国産）の陶器、磁器が出土しており、とくに陶器片は大量の数にのぼる。

今回は調査報告をするための時間的な余裕がなかったため、その概要を紹介する程度にとどめざるを得ないが、将来、八重山における村落（集落）の成立と展開を明らかにしていく上で、より詳細な検討が進められなければならないであろう。

末尾ながら陶磁器の整理にあたって御教示下さった、青山学院大学院生の手塚直樹、大橋几士の両氏に厚く感謝申し上げる次第である。

また、調査の実施にあたっては、石垣市教育委員会および富村辰夫氏の御協力を賜わった。さらに、石質の同定を沖縄県立博物館学芸員、大城逸朗氏にお願いした。記して謝意を表する次第である。

#### 調査組織

調査員 安里嗣淳（沖縄県教育厅文化課専門員）

〃 金武正紀（ 〃 ）

〃 当真嗣一（ 〃 ）

〃 大城 慧（ 〃 ）

〃 上原 静（ 〃 ）

調査補助員 大城洋子

〃 富村龍夫

作業員 池西シズ、上地ヨシコ、大底チヨ、黒島木、謝名堂泰イ、  
城間ヨネ、平良ハル、大工マツ、仲大底ヤス、仲大底シズ、  
仲宗根ヨシ、比嘉ユキ、平安座豊、真謝末、真久田ハツ、  
宮城トミ、米盛ヤエ

執筆分担 安里嗣淳

大城 慧

上原 静

## I 調査に至るまでの経過

「復帰」後、これまでの米軍占領時代における農業基盤の整備の立ち遅れを克服すべく、県下の多くの地域で圃場整備を中心とした農業基盤整備事業が、集中的に実施されるようになってきている。

石垣島においては、宮良川地域土地改良事業が、10年計画でもりこまれており、かなり広大な範囲にわたって換地分合等による圃場整備等が行なわれるようである。その一部はすでに「平得地区圃場整備」、「磯辺地区圃場整備」として実施され、いずれも文化財地域との調整で問題となったところである。

県教育庁文化課としては、これらの経験の中から、個別の圃場整備の調整では問題となることが多いことから、宮良川開発事業全体の中で文化財をどう扱うかということについて、農政側と文化財保護当局との間に、基本的な協議事項=覚え書を交わすべきであるという姿勢を表明していた。

このことに関する両者の協議が進行しないままに、今回の新川地区圃場整備が計画されたのである。この事業は団体営であるが、実質的には石垣市土地改良課が扱っており、1976年9月22日付で、石垣市長より県教育委員会あて、次のような文書が提出された。

昭和51年9月22日

沖縄県教育委員会  
教育長 仲宗根繁殿

石垣市長  
内原英郎

### 文化財の有無について(照会)

本市では、宮良川土地改良事業が計画され、昭和50年度より事業の施行がなされていますが、昭和52年度から別添図に図示してある地区で新川地区圃場整備事業91.2ヘクタールを実施します。

つきましては、当地区内に文化財、天然記念物等保護すべきものの有無について照会しますので御回答を願います。尚、沖縄県発行の「沖縄県土地利用規制現況図」では、地区内に埋蔵文化財があるよう図示されていますがその範囲内容等の確認が出来ませんので添付図面にその範囲等を図示下さいますようお願いします。

これに対し、県教育委員会では、次のような1976年10月28日付文書で回答した。

沖教文第 651 号

昭和51年10月28日

石垣市教育委員会

教 育 長 殿

沖縄県教育委員会

教育長 仲宗根繁

新川地区ほ場整備事業地域における  
文化財の有無について(回答)

さきに照会のあったみだしのことについて、下記のとおり回答しますので、石垣市長あて伝達方お願いします。

記

当該地域について概観調査を実施したところ、土器等の遺物が散布している。

事業計画地域が広大であるために精査をするに至らなかつたので、当該事業に係る作業の一環として、とくに分布調査を策定実施する方向で協議したい。

さらに、この文書の具体的な意味は、「事業計画地域が広大であり、県文化課でかつて行なった表面観察調査では、若干の遺物を得たものの、その詳細な内容と範囲を把握するに至らなかつた。

したがって、試掘を含む詳細な分布調査を必要とするので、それを圃場整備事業の一環として、農政側の予算負担で分布調査を行う方向で、今後協議してもらいたい」ということである旨を、石垣市教育委員会を通じて、石垣市土地改良課へ伝えた。

しかしながら、その後両者の具体的な協議が進展しないうちに、圃場整備事業を1977年9月に実施してしまった。同年9月県文化財

保護指導委員(パトロール員)の一人が、たまたま同地を訪れ、破壊されている遺跡を発見したのである。市教育委員会を通じて通報を受けた県文化課では、ただちに文化財保護法第57条の5の手続きを求め、これに従って事業者は遺跡地域にかかる工事を中止した。

その後、県教育委員会、石垣市教育委員会、県農林水産部、石垣市土地改良課の間で協議が続けられた。この中で農政側は、調査予算については、一切負担する必要はないとの方針を主張し文化財保護当局は原因者負担を主張した。

そこで、県教育委員会としては、圃場整備は地元農民の切実な要求であり、早急に調査を行なって文化財との調整をはかる必要があるとの立場から、農政側の事業を文化財保護当局の予算で肩替りした前例はないが、教育委員会予算によって、今回の発掘調査事業を実施することになったのである。

今回の調査を実施するにあたり、県農林水産部と県教育委員会との間で、次のような了解事項が交わされた。

#### 昭和52年度団体営新川地区土地改良事業 地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する覚書

昭和52年度団体営新川地区土地改良事業地内の埋蔵文化財の取り扱いにおいて農林水産部長と県教育委員会教育長は、相互に下記のとおり覚書を交換する。

#### 記

- 1 昭和52年度団体営新川地区土地改良事業地内で発見された埋蔵文化財の調査費は、特例として今回限り県教育委員会予算に計上するよう努める。
- 2 県教育委員会は、本覚書が交換され次第一週間以内に当該埋蔵文化財の調査に着手する。

調査に要する期間は、およそ80日とする。但し調査期間中にやむをえざる事由が生じた場合は、必要な期間を延長するものとする。

昭和52年12月3日

県農林水産部長 島崎盛武  
県教育委員会教育長 仲宗根繁

## II 調査の経過

### 1977年（昭和52年）第一次調査

12月5日（月）石垣市教育委員会との打ち合わせ、及び発掘地点の確認。

12月6日（火）基準杭の設定。調査地点の選定。

12月7日（水）発掘開始。並行して草木の除去作業。グリッド設定。

{

12月24日（土）各グリッドの写真撮影。出土遺物の梱包。第一次調査終了。

### 1978年（昭和53年）第二次調査

1月9日（月）52年度からの継続調査として、畑地部分のグリッド設定。発掘調査開始。

1月16日（月）雨天続きの為、最後の仕上げ写真ならず、一時那覇へ帰る。

注) 雨天が続き写真撮影の見込がたたないので、撮影可能な天気になるまで、現場を現状変更することなく保存するよう、直接現場の工事人に話し、事前に石垣市の教育委員会を通じて、その旨を事業者側に通知させた。

1月19日（木）発掘現場にブルドーザーに入る。

発掘途中の畑地部分全面を破壊。

1月20日（金）新川地区の仕上げ写真撮影の為、石垣に着。

1月21日（土）新川の現場へ写真撮影、遺構実測の為出かける。その時点で、遺跡が破壊されたことを知る。

今回の発掘調査は、圃場整備事業者側の都合により年度を別にして、第一次、第二次調査として期間を設定しなければならず、しかも現場を現状変更することのないよう、事前に通告しかつ了解を得てあったにもかかわらず、事業者側の一方的な判断のもとに、発掘途中で遺跡が破壊されるという予期せぬ結果となつた。

## Ⅲ 遺跡の位置と環境

竿若東遺跡は八重山群島石垣島の南部、石垣市街地より西の郊外にある。ちょうど市街地の西端の区切りともなる新川橋から西へ約500mいくと海岸に児童公園があり、この一帯は砂丘地となっている。この児童公園の砂丘地に接して琉球石灰岩の低平な赤土台地が、山手へ向ってきわめてゆるやかな勾配を示しながら広い範囲に亘って展開している。それはパンナ岳の南側に形成された広大な平野の一部に属するものである。

約8km北後背地には標高291mのパンナ岳があり、北西の名蔵平野との間を仕切っている。遺跡地を含む平野部が主として琉球石灰岩赤土台地であるのに對し、山地は古生代末～中生代初に位置するとされる富崎層(チャート,千枚岩,砂岩)から成っている。

遺跡の前方(西南側)には長大な砂丘が形成され、遠浅の海が開けている。洋上には竹富島や西表島が横たわってみえる。

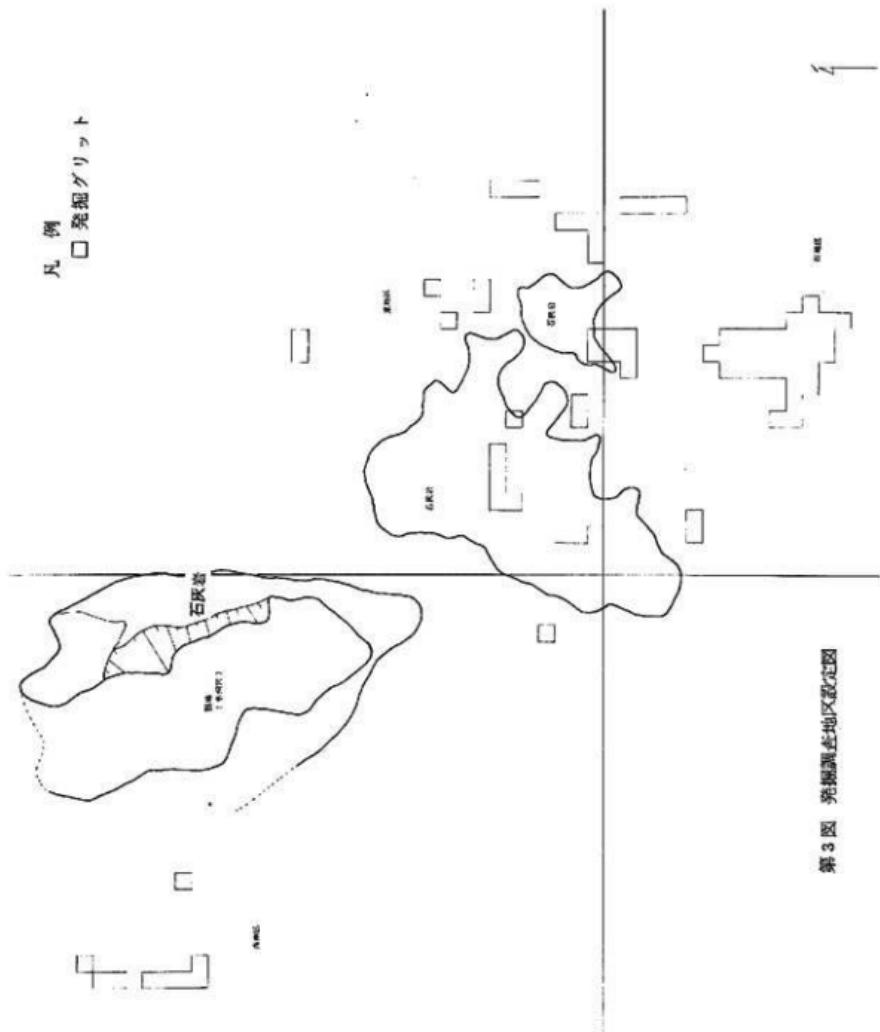
遺跡地一帯はギンネム林であったが、発掘の結果によれば、以前は畑耕作が行なわれていたようである。遺跡地の中に比較的大きな縦方向の石灰岩洞穴があるが、半分は埋もれた状態である。小崖部が一部巣糞墓として使われているが、かってこの洞穴において湧水が得られたかどうかは確認できなかった。遺跡地付近東側には、新川橋のかかる小川があるほかは、水の得られる場所は現在のところ確認できない。

付近における遺跡の分布状況は巻頭図版に示すとおりであるが、本遺跡と同様ほとんどが琉球石灰岩赤土台上にあり、海岸より比較的近い距離に位置している。いずれも平地の中で石灰岩盤が点々と露出してわずかに微高地となった地形を占めている。

( 安里嗣淳 )

凡例

□ 発掘調査ト



第3図 発掘調査地不規定期

## IV 調査の概要

### 1 調査の概要

竿若東遺跡は、発掘前の予備調査から広大な範囲にまたがって、遺物が散布していることが確認された。同地区一帯は、全域にわたってギンネムが拡がっており、包含層の保存状態はきわめて悪かった。

昭和48年から50年にかけて、石垣市役所で作成された『沖縄県石垣市地籍一覧図』中の「小字集成図」からは、同地区一帯が竿若原となっており、今回発掘した範囲も、遺跡の中心地点が同地区内の2007-1, 2008, 2009, 2010, 2012の6地番におよそまたがっていることを確認した。古老の方々は、竿若原一帯を「ソーバガー」と呼びならわしていたという。

したがって、本報告書の遺跡、呼称については、上記の地籍図に基づいて竿若という字名を、さらに今回の発掘で、特に集中して遺物が出土した東地区を遺跡の中心部と考え、発掘地点の1つのメルクマールとして、「竿若東遺跡」を名称として用いた。

今回発掘した面積は、事業者側（土地改良組合）の都合により一部地区（畠地）をのぞいて、52年には約730m<sup>2</sup>を発掘し、12月5日から12月27日までの23日間を第一次調査とした。

翌53年には、第二次調査として1月10日から15日までの約1週間、残された畠地部分500m<sup>2</sup>を発掘し、約1ヶ月で総計1230m<sup>2</sup>の面積を発掘した。

今回の発掘は、周辺の遺物出土範囲確認調査も兼ねる意味で特に東地区を集中的に、遺跡の全域にわたって調査を行なった。さらに発掘と並行する形で、遺跡全域の表面採集、周辺遺跡の踏査も行なった。

その結果、ほぼ全域にわたって良好な包含層は残ってなく、石灰岩基盤近くまですでに搅乱、破壊された状態であった。全体的に岩盤上までの層の堆積が薄く、ほとんどどのグリッドが20~80cmの深さであり、層序的把握は困難であった。

東地区内の畠地部分から検出された柱穴の他は、構築物・遺構等の出土確認はなく、全体に大きな岩盤が拡がっている状態であった。

発掘は、遺跡全体を調査しやすいように二地区に分け、一つの目やすとして、遺跡のほぼ中央部に位置する凹地石灰岩の崖葬墓群一帯（時代不詳）を境に東地区、西地区に区分した。崖葬墓群については、後章でふれるところにする。

東地区において、グリッド方向は、石灰岩基盤で囲まれた畠高地一帯を含む、

最も遺物が集中して採集できた地点を中心となるように、程度東西方向に軸線を決定した。

基点をタ-27とし、南北方向へ、アイウエオ順、東西方向へ1, 2, 3……と番号をうち、 $8 \times 8$ mを1グリットとして、トレンチ設定を行なった。(図3.)

## 2 遺跡の状態

東地区では、まず石灰岩の露山によって囲まれた微高地範囲内にグリットを設定し、発掘を行なった。(図版2.)

黒色土によって表面が覆われていて、比較的良好な、包含層の如く思われたが、ほとんど搅乱され、20~80cm下では岩盤又は赤土が露呈し、出土遺物も全体の面積からすると微少であった。遺物は、陶磁器・土器・自然遺物等の細片であった。周辺にもいくつかのグリット発掘を試みたが、遺物の出土は少なかった。石灰岩基盤で囲まれた場所は、小さな起伏の変化を示し、一見マウンド状に微高地を形成している。敷石など石組遺構の存在は確認されなかつた。

この一帯が、遺構の残存物として捉えられるものであるか、あるいは自然石の石灰岩盤が露呈した結果、なんらかの構築物囲みとして使用されたものか、判断できなかつた。囲みの一方においては、石灰岩岩盤露出の上に、小さな石を寄せ集めた状態の箇所も確認された。先に記したごとく、遺跡はすでに破壊されており、ブルドーザーが入って整地作業を行なっていることから、あるいはその際に寄せられた可能性もある。

この集石された中から、割合大形の陶磁器片が採集された。

同地区は、ブルドーザーで土石が寄せ集められて、マウンドを形成した所が数ヶ所あり、黒色土が積み上げられ、中に大形の青磁片、陶器片が集積されていた。表採による遺物には、かなり大形の破片を含むものが多くあったことから、調査以前にすでに全面破壊されており、遺跡の中心部と目されるところでも、出土遺物は少なく細片であった。

また、継続調査として行なった同地区内畑地部分からも、遺物の出土を見た。畑地中央部から東西南北に十字形のグリッドを設け、順次拡張して全面発掘を行なった。(図版5.)

出土した遺物は、陶磁器・土器・貝殻等であり、やはり細片で、他の地点に比べると、比較的多く出土している。

同地点は、岩盤上まで全面にわたって搅乱されており、層序の把握はまったくできず、20~25cm下で岩盤が露呈し、何回かの作物の植え替えにより、土質はき

わめてサラサラした状態であった。

明らかに、この部分が搅乱されているという証拠の一つとして、岩盤地山上に耕作の為の犁の爪跡がはっきりと残されており、放射状に何本かの小さな溝が伸びていることを確認した。（図版5。）

今回の発掘の中で最も特筆されるべきものとして、同地内からの柱穴の出土があげられる。（図版6。）柱穴は、キ-12、ク-12、キ-18、ク-18の各グリッドにまたがり、地山上に6穴掘られていた。平均直径は20cmを計り、等間隔に掘られていた。

なお、遺構に関しては、次の「遺構」で記述する。

統いて西地区の包含層も東地区同様、すでに岩盤近くまで搅乱されており、最も搅乱の著しい場所であった。出土遺物も細片で量的に少なかった。（図版3。）

出土遺物は、石器・貝錘・土器片・陶磁器・貝殻等であった。ヨ-50、ヨ-51ラ-51、リ-51、ル-51の各グリッドを中心に発掘を行なったが、目ぼしい遺物の出土はなかった。

20~25cm下で岩盤の露呈が見られ、ここでも層的な把握は困難であった。

著しい搅乱地域と出土遺物が少ないとから、数グリットのみをあけて遺物の出土状況を確認しただけで、東地区に集中して発掘を進めていった。

上記した各グリットからは、石灰岩塊が露呈しているが、遺構との関連は確認されなかった。

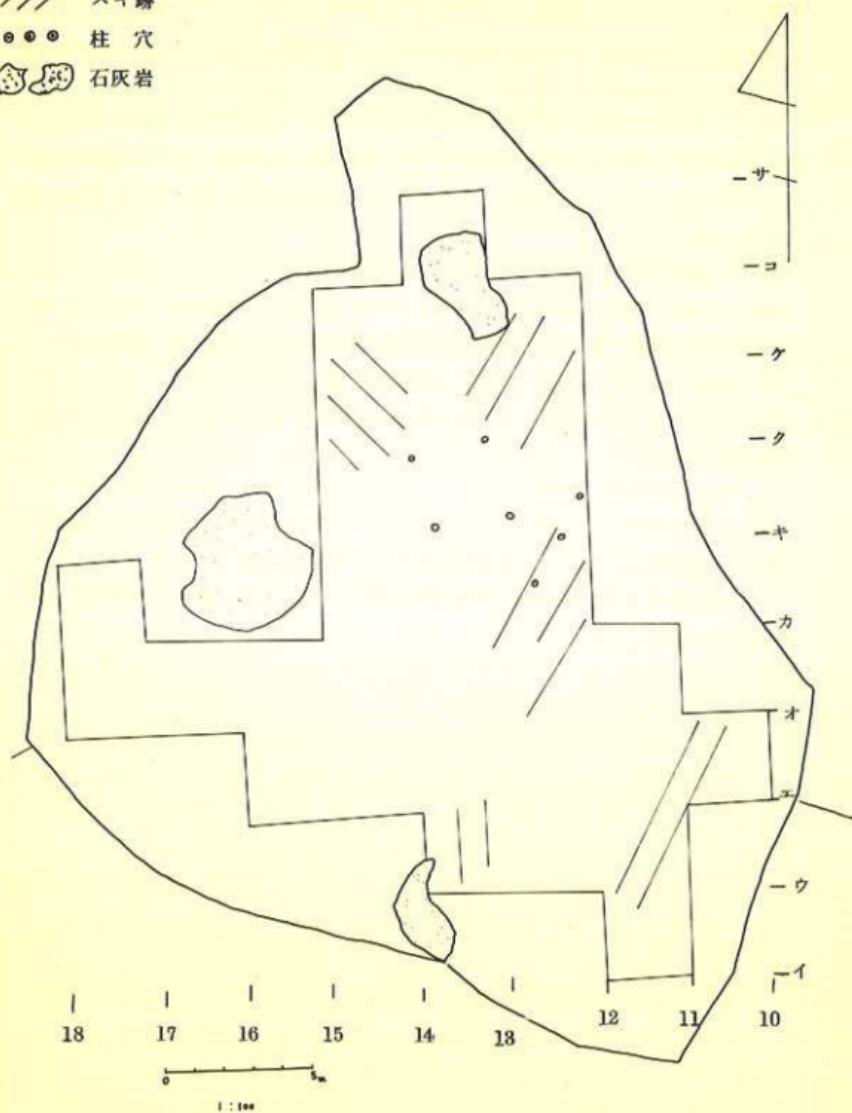
（大城 蕉）

(凡例)

/// スキ跡

● ● ● 柱穴

◎ ◎ 石灰岩



第4図 煙地区 完掘平面測量図

## V 遺跡の内容

### 1 遺構（第5図版）

畑地内、耕作土除去後、岩盤地山上に柱穴を確認。キ-12、ク-12、キ-13、ク-13の各グリットにまたがって検出された。柱穴は、全部で6穴掘られていた。平均直径が20cm台を呈し、石灰岩を補助石の意味あいからか、くりぬいた状態のものであった。

柱穴と並行して、ほぼ円形と酷似する上面平坦な石灰岩が露出、基礎的なものであった。

6穴の中6穴は、南北方向に等間隔に掘られており、1辺2.50mの長方形状に延びていた。平均直径は20cmを計り、深さは25cm、最深部で50cmを計るものがあった。柱穴の配置状態からすると、最深部の50cmはプランの中心部に位置する。中には、明らかに柱を補強したと思われる半月状の石が、円周にそって埋め込まれている状態のものがあった。（第6図版）

特に、1つのプランに入りそうな柱穴、いわゆる前述の四つの柱穴底部からは、小破片ではあるが、柱穴プランにおいて磁器片1コ、焼けた青磁削部一片、叩き石1コ、貝殻、巻貝1コを出土した。

南北方向を概に從えて見た場合、1辺に3ヶ所の柱穴配置ということになり、1辺の2.50mも、約2間の間口となる。残念ながら、それぞれの柱穴の配置状況からおると、他1ヶ所が確認できなかった。

以上のような状況のもとに、柱穴配置の状態を考察していくと、明らかに何らかの構築物があったものと思われる。

ただ、青山学院大学が発掘したヤマバレー遺跡や、県教育委員会発掘の平得・仲本御嶽遺跡で検出されている石敷遺構との関連や、その性格を有するものではなかつた。

このように柱穴が比較的等間隔に配置されており、方向を同じにして検出されていることから、住居プランとの関連を想定せうる。住居社であるとする、あくまで想定の域を出ないまでも、可能性として強く残している。

しかしながら、このことが即、遺跡との関わりで捉えられるものかどうか、即断はできない。

特に最近まで、この一帯は何ヶ所かが畑地に利用されたということであり、その時に構築された畠小屋の可能性も残していると考えられる。遺跡近くに、小さな

烟小屋が残されていることから、一応考慮しておく必要があると考える。

一方において、柱穴内から出土した断片的な遺物から考えると、遺跡との関係も想定しなければならないであろう。

いずれにしても、柱穴プランから住居の可能性は残すとしながらも、時期的な判断は、本報告において即断することはできない。

今一つ、畠地部分に関しては、大きな問題を残す結果となった。それは、調査中途において、一方的な事業主体者側の無秩序な工事進行のもとに、緻密に掘り出した柱穴群を含め、畠地全面にわたって、ブルドーザーの破壊を受けたことである。

従って、この地域に関する詳細な図面・写真等を本報告において残念ながら呈示しえなかつたことは、本報告の遺構編において、状況把握の展開に精彩さを欠いたものとして、責任を感じるものである。

(大城 薫)

## 2 遺 物

### (1) 中国製青磁

青磁は陶器、土器について多く出土した遺物であり、東地区全体にわたって出土した。多くは細片で、器形を知りえるものは少なく、全体を復元できる火形破片の出土は、わずかに数点であった。部分的に残った口縁部 立ち上がりや底部などから推察して、器形は主に碗か鉢と思われるものである。1点のみであるが、皿類に分類できるものがあった。

釉色は、量的に片寄りがあり、II・III類中に集中して、暗緑色・淡緑色・淡青色が主である。中に小数ではあるが、透明性の強い黄緑色・褐緑色などがある。

施釉の状況を見ると大半が、内面は見込部分まで施釉されており、中に貫入が認められるものがある。外面は高台の疊付の部分が施釉されているもの、あるいは疊付の部分が施釉されてないものとがある。

底形・高台器形は大半が厚みをもっており、1.2cmを計るものが多い。

底形・断面から、生焼きの状態で内側まで火度が上がってないのがある。

高台器形も、類別によって5式ぐらいに分けられるものがある。高台の特徴の中に、高台内側に窯道具の跡を残すものや、高台内底が露胎しているものもある。露胎部は茶色に塗られている。

高台内側に残された轆轤引きの痕跡から、大半が左回転ロクロが使用され、中央に兜巾状(カブト)のものを残しているものがある。(第6図・3,7図・3 図版9の7・1)

又、高台器形、特殊なものとして基筒状に作られたものがあり、上述の一点の皿は、基筒作りを高台に成形。(第6図4、図版9の8)さらに高台内を蛇の目にけずったものがある。

口縁器形は、直するもの口唇部厚みが小さくわずかに外返するもの、口唇部が丸みをもち外返するもの、内彎するものの4式に分類が可能であり、外返するものが量的に多い。

文様では、古い時期のもので蓮弁文のヘラ彫りが施されているものがあり、蓮弁が大きい。(第5図の4・5・6、図版7・8・9)

鏡類の見込部は、大半が無文であるが、中に折枝文や草花文を型どったスタンプが押されたものがある。(図版9の5・6、同図版3・1・4、図版10の5、図版11の1・2・7)

さらに、内壁底径部分にヘラ彫りの沈線文が有るものや、外面口縁部下に数本の沈線文を彫ったものがある。(第5図7・8、8図の2、図版8の1・2、図版10の2)

特殊器形として袋物の徳利片と壺片がある。

青磁は、素地の点からI類からVI類に分類し、又その他の青磁片として、特殊器形を設定した。

以下、次のような分類になった。

陶磁器

青磁

I a類 図版8の1・2・3の実測図は割部細片の為省略した。

素地——灰白色でガラス質の劈開面を呈す。比較的気泡が少なく、胎土が緻密なものである。

釉色——釉色は、安定している。やや暗い緑色。貢入の入っているものもある。

器形——碗

文様——内側、底径に沈線を施す。

I b類 (第5図1・2・3・4・5・6、図版8の4・5・6・7・8・9)

素地——褐色を帯びた灰白色。ガラス状の劈開面を呈す。I a類同様、気泡は比較的少なく、胎土密である。

釉色——暗緑色

器形——碗

文様——薄く沈線の文様が、口縁部下外側に入る。(図版8の5)

口縁器形 蓮弁文の入るものがある。(第5図4・5・6、図版7・8・9)

・外反する。(第5図1)

- ・わずかに外反する。(第5図2)

- ・直口 (第5図5)

Ⅱ 類 (図版8の1・2・3・4・5・6・7・8, 図版9の5・6・7・8, 同図版の2・3・1・4)  
(第5図7・8・9・10・11・12・13・14, 6図1・2・3・4, 7図1・2・3・4)

素地——淡灰白色, 及び灰白色。

気泡少なく, 細かな砂粒が入る。

器形——碗, 鉢

文様——・見込み部分, 1点折枝のスタンプ有り。(第7図2, 図版9の3)

- ・花文有り。(第6図1・2, 第7図3・4, 図版9の5・6, 同図版1・4)

- ・見込み部分まで釉がかかる。

- ・内底壁, 底径近くにヘラ彫りの沈線文有り。

- ・買入のあるものもある。

- ・外側, 口唇下に数本の沈線を引く。(第5図7・8, 図版8の1・2)

※特殊器形 (第6図4, 図版9の8)

器形——皿状

釉色——淡青色。

高台——基筒状に作る。高台内を蛇の目にけずる。

露台部→茶色に塗る。

口縁器形

- ・口縁部が直口するもの。(第5図12, 図版8の6)

- ・口唇幅小さく, わずかに外反するもの。口唇部 0.5 cm 幅で, わずかに外反。(第5図13, 図版7)

- ・丸みをもちらがら外反。(第5図14, 図版8)

- ・わずかに内側。(第5図7, 図版1)

高台器形

- a, 高台の外側まで釉薬がかかり, 豊付部から内側は塗ってない。

高台豊付幅が広く, 低い。(第7図1, 図版9の3)

- b, 高台の外側まで釉薬がかかり, 豊付部から内側は塗ってない。

高台豊付幅が小さく, 高い。(第7図2, 図版9の3)

- 高台外側まで釉がかかり, 豊付部を残す高台内側器輪を, 筆で塗つてある。(第7図4, 図版9の4)

- a, 高台外側から内側にかけて釉がかかり, 高台内側に窯道具の跡を残す。高台の幅が小さく, 高い三角状を呈す。(第6図1, 図版9の5)

- b, 高台外側から内側にかけて釉がかかり, 高台内側に窯道具の跡

を残す。高台幅が広く、低い。(第6図2、図版9の6)

※高台内側が露胎しているものが1点。(第6図3、図版9の7)

II b類 (第8図1・2・3・4・5・6・7・8・9・10, 9図1・2、図版10の1・2・3・4・5・6・7・8・9・10、図版11の1・2)

素地——暗灰色、及び灰色。

気泡少なく、II a類よりも荒い胎土。

釉色——淡緑色、淡青色、暗緑色。

器形——碗、鉢。

文様——・見込みに花文のスタソブ、折枝文有り。(第9図1・2、図版11の1・2)

・内壁にヘラ彫りの草花文1点、大きな貫入有り。(第8図5、図版10の5)

・外側に数本の沈線文有り。(第8図2、図版10の2)

高台——削り痕を残し、左回転輪轍使用。

中央にほとんど兜巾状のものを残す。

口縁器形

・小さく外反 (第8図1、図版10の1)

・口唇部(0.5~0.7cm)が外反。(第8図の4、図版10の4)

高台器形

・高台の外側に勧めかかり、豊付部はねってなく、高台わきの面取りがめま。(第9図の1、図版11の1)

・高台外側から豊付部まで勧めかかり、高台わきが面取調整されている。(第9図12、図版11の2)

・高台外側から豊付部まで勧めかかり、豊付部が細く三角状になる。(第9図5、図版11の4)

・高台外側から内腹に勧めかかり、豊付部に勧めかからない。底邊は小さい。(第9図6、図版11の5)

・高台内側に褐色を帯びたもの。(第9図4、図版11の4)

III類 (第8図11・12、9図7、図版10の11・12、図版11の6)

素地——淡灰白色。気泡が多いが、胎土は緻密。

釉色——透明性の強い黄緑色がかかっている。

器形——碗、鉢

高台器形

・高台幅が大きく低い、II a類のIの式に属し見込部分を蛇の目に成形、

高台部に釉がかかっていない。(内側面)

(第9図7、図版11の6)

口縁器形

・口唇部が小さく、わずかに外反。(第8図の11・12、図版10の11・12)

#### IV 類 (第9図8, 図版11の7)

素地——暗灰色。気泡はきわめて多く、白色及び黄色の細砂粒を多量に含む。

劈開面は、ざらつき、粒を固めたような感じで荒い。

釉色——褐緑色、及び淡緑色。

高台器形

- ・大半、I b類に属する。

- ・左回転 機體 で成形されており、高台裏、中心に兜巾 状の成形痕を残す。

(第9図8, 図版11の7)

#### V 類 (第9図9, 図版11の8)

素地——灰色、淡灰白色

岩石質の劈開面、II aより全体的に胎土が荒い。

磁化していないものがある。

釉色——淡青色、明緑色。買入が多い。

文様——なし、細片の為。

高台器形

高台削りが丸みを帯び、外側面まで釉がかかり、高台置付部から高台裏にかけて釉がぬってなく、赤茶色で露台している。(第9図9, 図版11の8)

#### VI 類 (第8図13, 図版10の13)

素地——灰白色、気泡少なく、岩石質の割れ口であるが、胎土は比較的緻密である。

釉色——明るい淡緑色で、透明性有り。いわゆる淡青釉としているもの。釉薬も、きわめてうすく施している。

細かい買入が入っている。

内外面ともに胴部のみ施釉。

器形——碗。

器壁薄く、口縁部から胴部部分は、0.8 cmの薄さである。

外面に機體引きを残す。

口縁器形

- ・口唇部が直口。

(第8図13, 図版10の13)

### ※その他の青磁片

素地——淡灰白色，Ⅲ類に似ている。

釉色——淡緑色。表・内ともに釉がかかっているが，内面は薄くかけられている。

器形——徳利。

内側に成形痕を残す

素地——暗灰色。

釉色——淡青色。内側に施釉なく，外側にだけ施釉。

器形——壺。内側に轆轤 成形痕を残す。

### (2) 白磁

白磁も青磁同様，細片ではあるが，量的には数多く出土しており，青磁と類似の状況を示している。

やはり，東地区を中心として，グリッド地点を別に広範囲にわたって出土した。

器形全体を知りえるものは少なく，高台器形や口縁部立ち上りから，確に器形復元が推定できた。

素地は大体において灰白色，ないしは灰色であり，胎土が密であるものと，中に気泡を含むものが比較的多い。

釉色は，白色，灰色を帶びたもの，あるいは，青味を帶びた白色が施釉されている。比較的，安定した釉が施されているが，中には買入が認められるものもある。

施釉の状況を見ると，口縁の内外面から内底径近くまで釉がかかるもので，高台や高台わきの施釉をぞいでいる。

さらに，内底部を蛇の目に削り出しているものもある。また内底露胎部には，重ね焼きの轆轤 痕を残すものがあり，轆轤は大体が左回転である。

高台器形は，バラエティーに富んだものが少なく，高台幅が広くけずり出している。高台裏に兜巾 を残すものや，鉋削りの跡が残るものもある。

高台内外壁面に，削り痕を明瞭に残すものがあり，高台わきの面取り調整もある。

口縁器形においては，口唇部か内彎するもの，薄手で外反するもの，口唇部が肥厚するもの，いわゆる玉縁といわれるものが1点含まれている。量的には，内彎するものが多い。

文様についてみると，口縁が内彎する碗類においては，大部分が無文のもので

あるが、外面に沈線を描いたものや、内底面には、レリーフ(浮きぼり)の文様が認められる。草花文の型押しや、櫛状工具で見込部分に文様をつけた。いわゆる櫛齒文と沈線文が描かれたものも認められる。

白磁もやはり、素地によって分類を行なった。その結果、I類からIV類までは、本来の白磁と認められるものである。

V類は、白磁か沖縄陶器の一部か、判然としないものである。口縁部から胴部まで施釉されたものを見ると、白磁に類似するように思えるが、依然としない。中に気泡を含む。口径の大きさは、15.6cmで碗類である。

以下、次のような分類結果となった。

白 磁 (図版12の1・2・3・4・5・6・7・8・9、図版13の1・2・3・4・5・6・7)

I 類 (第10図1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17)

素地——灰白色、ないし灰色。

岩石質の劈開面を呈する。気泡が多い。

器形——碗、鉢。

釉色——白色。やや灰色味を帯びた白色。

貰入を帯びたものもある。

文様——・内底面に線削りの文様を施すものがある。(第10図の16、図版13の5)

・見込みに草花文の型押しがある。(第10図17、図版13の7)

・櫛状工具で見込部分に文様をつけた、いわゆる櫛齒文と、沈線文がある。(18~14C)。(第10図15、図版13の1)

#### 口縁器形

・口唇部が、内側するものが大半。(第10図2・3・4・9、図版12の2・3・4・9)

・外反する。薄手。(第10図5・7、図版12の5・7)

・口縁部肥厚、1点。(玉縁)。(第10図6、図版12の6)

#### 高台器形

・釉は、高台及び、高台わきをのぞいて施釉。(第10図11、図版13の4・6)

・高台幅を広く、削り出している。(第10図10・12、図版13の4・6)

・左回転櫛轍で削り出し、櫛轍をとめた後、高台裏をハの字状に削り出している。(第10図の14、図版13の2)

・鉋削りの跡が残るものもある。(18~14C)。(第10図15、図版13の1)

II 類 (第11図1、図版14の1)

素地——白色を呈し、岩石質の割れ口を呈するが、緻密な胎土である。

釉色——青味を帯びた白色を呈する。貢入がなく、安定した釉。

文様——内底には、レリーフ(浮き彫り)の文様が認められる。

(第11図1 図版14の1)

#### 高台器形

・高台は、大半が轆轤で削ってあり、I類よりもていねいな仕上げである。中に1点だけ兜巾状に、残されたものがある。

#### III類 (第11図2, 図版14の2)

素地——灰白色、やや暗い白色を呈し、岩石質の割れ口である。

I類より気泡は少ないが、II類に比べてきめが荒い。

釉色——やや青色を帯びた白色。釉は、外側面及び内面に施釉。内底部は蛇の目に削り出している。貢入はない。(第11図2, 図版14の2)

#### 高台の作り

I類と大差なし

#### IV類 (第11図3 図版14の3)

素地——灰白色で、岩石質の割れ口を呈し、細かい気泡が多い。

釉色——内外壁にかけられている。底径近くまで施釉。

灰白色を呈し、うすく施されている。

#### 高台器形

・高台幅を小さく削り出し、内外壁面にも削り痕を明瞭に残す。高台も低い。内底、露胎部に、重ね焼きの轆轤痕を残す。轆轤は左回転。

(第11図3, 図版14の3)

#### V類 (第11図4 図版15の1)

白磁か、沖縄陶器の一種か判然としないが、灰白色の釉を薄く、内・外側とも底径部分近くまで施釉されている。小さな貢入あり。施釉された部分は、気泡がある。

全体に薄手で、内底径に轆轤引きの痕を残す。

高台器形は高く、疊付部は小さい。施釉はなく、高台裏と内壁にも轆轤引き痕を残す。高台裏には、七の字のしるしがある。

口唇部は、直口する。碗である。

#### (3) 染付 (第11図5・6・7・8・9・10・11・12, 図版14の4・5・6・7・8・9・10・11)

染付の出土は微量で、陶磁器・土器に比べて極端に少なかった。

断片的な出土で、小破片である。器形は、浅鉢か碗。中国製と思われるものは11点出土しているがうち文様のはっきりしているものは8点だけであり、一括して実測図にまとめた。

時期的には、16Cのものとおさえられている。

全体的に口縁部器形は、外反するもの、わずかに外反するものである。

又、底部器形を知りえるのは(第11図7、図版14の6)のわずかに、1点だけであり、高台幅が小さく、脇付部が三角状を形成し、底径は2.0cmである。内側底形には2本の沈線文が描かれており、見込部分にも文様があるが、形状がはっきりしない。草花文とも思われる。

高台外側にも、2本の沈線の文様が描かれている。底径部の大きさから、杯と思われる。

(第11図5・7、図版14の4・6)は灰色で緻密な胎土であり、淡青黒色の具須を使用し、花文が描かれている。

(第11図5、図版14の4)は、表裏ともに小さな貫入が見られる。

(第11図6・8・9・10・11・12、図版14の5・7・8・9・10・11)は、白色の素地で、胎土は密である。青紫色の具須を使用し、草花文が描かれている。

(第11図6、図版14の5)の場合は、表裏面ともに文様が描かれている。

以上の中國製染付の他に、網目状を文様とする有田の染付片3点が含まれている。(図版12の右1・2・3)

竿若東遺跡出土の染付は、青山学院大学によって発掘された砂川元島遺跡<sup>①</sup>、県教育委員会出版の八重山石垣島平得仲本御嶽遺跡出土の染付の時期、いわゆる、16C～17C頃のものに類似性を見つけることができるのではないだろうか。

(大城 慧)

#### (4) 黒褐釉陶器 (第12図1,2)(図版16の1,2)

本調査で最も出土量が多かったもので、ザルの7つ分得ているが、それらは全て、細片で器形を復元しえるものはなかった。出土地区をみると、最も畠地区部で多く出土している傾向があった。

分類は胎土を主にし、焼成状態を観察しながら、9類に大別した。以下、簡単に記述する。

##### 1 類

胎土が精練され、緻密で不純物がみられない炻器質のものである。第12図1は器厚が2.5mm～4mmと薄手の小形の盃型をなすもので、口縁部は丸味を持ち、口径推算7.5cmを有する資料である。同図2は、前述同様の薄手の

玉縁をなす口縁部片である。

施釉は、前者が黒釉を表面から口縁内側までなされ、後者のものは風化のため、はげ落ちてしまつて不明確である。

### II類（第12図3,4）（図版16の3,4）（図版16の5,9）

胎土が須恵器にちかく、草緑色の釉を器面上に施したものであるが、不純物及び鉄分がとび、斑点状を呈したグループである。

第12図3は、口縁部を折り上げ、玉縁と成形したものである。外壁側には若干、折り曲げのためのミゾを残す。施釉は、外器面及び肩部までなされている。器壁が6mmの壺形の資料である。口径推算9cm。同図4は、口縁部を欠する壺形破片で、内壁に輪積の跡が明瞭にみられる。器壁は5～6mmをなし、外壁肩部に重ね焼の痕跡が認められる。同様の重ね焼き時の付着痕が、同図3では、口唇上に観察される。なお焼成はI類の石器グループに比較し弱い。

### III類（第12図5～9）（図版17の1～3,7,8）（図版17の4～6）

胎土に砂粒（小ジャリ）を多く含み、色調が褐色ないし橙色をおびる。陶器中、もっともやわらかい感を受ける、一群である。釉は、焼成温度が低いため、不明瞭である。器形は壺・甕をなすものとがあり、口縁部の形状には、2タイプみられた。口縁部の折り曲げ断面が円を描く、いわゆる玉縁状のもの（第12図5）と、口縁部を折り曲げ、内傾されたもの（同図6,7）があるが、このタイプの折り曲げ整形が概して丁寧でなく、一部頭部に付着したものが多いため、底部は計測可能なもので同図8、10.2cm。同図9、10.4cmと計測される。

### IV類（第13図1～9）（図版18の1～7）（図版19の5,4）（図版19の1～3）

胎土が陶質で荒く、不純物が多く混入している。器形は壺形・甕形を示す。施釉は褐釉でなされ、I類に比して良くとけている。

口縁部は、断面が玉縁状をなすもの（第13図1）、口径約11.5cm、断面がほぼ三角状をおびるもの（同図2）、口径約10.7cm、口縁部断面が逆L字状を呈し、口唇が平坦になるもの（同図3）、平口の口縁部を直下部から外壁側に若干折り曲げたもの、（同図4）の4タイプに分けられた。

同図4は、施釉を外壁のみ、同図1,2は内外壁を、同図3は、口唇上が無釉で、内壁を施すものである。内壁の釉は、かなり光沢を残している。水平方向に外耳を貼付した標品（同図7）は、図に示した如く、釉はかなりはげおちている。

本類陶片に凡字体の刻印を有する破片が含まれ、同図5の上文字は「真」と判読できるが、その下文字は欠損のため不明。同図6も細片のため明らかにしえない。底部は同

図13推算11.2cmの平底で、内面は灰色の釉を施した輪積みの跡が残っている。外面は、褐色が底部近くまで流れ、たたみ付き部は離形剤が附着し、粗面を呈する。

V 類 (第14図1~5) (図版20の1~3, 5, 6) (図版20の4)

胎土は全体的に赤色をおび、気泡が多く、石英を含み、瓦質を呈す。焼成温度は低い。施釉は、鉄釉(茶色をおびる)をもちいている。

第14図1は、水平方向に外耳を貼付した脛部片で、表面及び内面の肩部まで施釉されている。このグループには、刻印を有する標品があり、いずれも「大吉」と判読できるが、同図2は、字形が凡字体をなす。平底の底部は、鉄釉を内底部まで施してあり、器壁が1~1.8cmと厚く、底径約1.2cm(同図4)のものと、約14.8cm(同図5)ものがある。

VI 類 (第14図6~9, 第15図1, 2) (図版21の4, 1~8, 7, 8) (図版21の5, 6)

胎土は、須恵質で灰色を呈し、1類同様の硬質で砂つぶを多く含んでいる。釉は光沢のある黒釉で、裏面には鉄分をねってある。

器形は、壺・甕である。口縁形態は二タイプに分けられ、第14図7に示した如く、断面が丸形を示さず若干肥厚したもので、口縁内側まで施釉されている。同図7は、平口縁を口縁直下から外壁側へ若干折り曲げたもので、施釉は同図7同様に内壁までなされている。外耳は、親指と人差指で押しつけて貼付したもので、明瞭な指痕が残っている(同図6)。底部壁は、0.9cm~0.6cmと割合薄く形成され、第15図1は、外壁の底部面まで黒釉がかけられている。推算16.6cm。同図2は、底径10cmを測り、内部面には光沢を有するほどの黒釉が施されている。

VII 類 (第15図8~5) (図版22の1~3) (図版22の4~11)

胎土は精練され、不純物が少なく、器表面は光沢のある黒釉が施されている。内面には、鉄釉がかけられている。第15図8の器形は、外耳からして壺形かと推定される。同図4は、細片のため、器形を明らかにしえないが、外観が把手状を示す。同図5は蓋で、表面に三條の沈線を認め得る。

VIII 類 (第15図6, 7) (図版22の1, 2)

第15図7, 6は壺形の口縁部片及び頸部破片である。胎土分が軽く、割合緻密で須恵質をなすものである。口縁部は玉縁を形成し、頸部には、小さい三角状の凸帯を一条めぐらしてある。器壁は、4~5mmを測る。

IX 類 (図版22の8~7)

図版22の8~7に示したもので、砂粒が器面上に多く露出した、焼きしめ良好のグループで、釉は茶褐色を帯び、光沢を有している。全て脣部片であった。(図版22の8~7)

以上、胎土中心に分類を行なったが、これまで各分類中に口縁部の類似するタイプがみられたので、ここでまとめてみると、6種に分けられた。(図版24の1~18、図版25の1~4)

1. 第18図1,2例で、割合薄手の口縁部が丸味をなすもの、もしくは、微弱な肥厚を示すもの。
2. 同図3で、口縁部が平縁のものが多く、口縁直下から外壁側にわずかに曲げたもので、若干凸状を呈す。
3. 同図4,5,6の様な口縁部断面が、逆L字状をなす一群で、口唇上は平坦面を呈している。
4. 玉縁を形成するが、口縁を折り曲げた後、外壁側に接着することなく隙間をつけたもの(同図7,8,9,10)、折り曲てから、入念な整形をおこない、その断面が丸く描くもの。(同図11,12,13,14)
5. 同図15に示した、口縁部断面が方形状をなすもの。(図版18の2)
6. 皿状器形を有した、口縁部が若干肥厚したもの。同図16,17がみられた。

#### 摺鉢 (第16図1~4、第17図1~3)(図版26の1~4、図版27の1~3)

胎土が赤褐色を呈した炻器である。口縁部は2例で、いずれも口縁部の断面が逆L字状を示す。内1例は、片口を形成している。

底部片は、割合多く得られた。内面に施された櫛目には、数種認められ、シャープなものから、雑な感を受けるもの等が見出される。櫛目は全て、底部面から口縁部へかき上げて、成形している。

第16図は、片口を有し目のそろった7本を単位とする櫛工具で、深くシャープに、口縁近くでは櫛間に余白とてかき上げ、その後、口縁部の櫛目痕を水平方向に撫でによって目をそろえたものである。口径推算28cm。

同図2では、18本を単位とする櫛目が残り、工具は斜上方方向に回転する様にかき上げたもので、口縁部の調整は同図1と同じに、撫でによって消しそろえている。

同図3は、2の資料同様のかき上げ方で行なっており、かなり密にほどこしてある。外面の胴部中央には、二条の沈線がめぐらしてある。紹介資料中、最も器壁の薄いものである。

同図4は、外面に光沢のある茶色の釉を施した摺鉢である。櫛目は、11本を単位としており、底部面で、交互に重なる様にかき上げ、のちに、底部中央をひとかき仕上げをしたものである。

第17図1は、第16図4に類似する底部片で、14本の櫛工具を用いて、その仕上げは雑な感

を受け、ミゾ幅も比して広い。

同図2は、底径が9.6cmをなす資料で最も大きな破片である。器面に輪積みの凹凸の跡が明瞭にみられ、櫛は底部から密にかき上げてあるが磨滅しており、その数ははっきりしない。

同図8は、外面に鉄釉を施したもので、内面の櫛目は、図に示した如く目の大きさは不ぞろいで一定せず、又荒く、雜なかき上げをみせるものである。前記の資料同様に櫛目は、磨滅が著しい。

#### (5) 須恵器 (第18図18~22) (図版28の1~5)

第18図18~22に示した5例で、いずれも胸部、小破片のため、器形は知り得ない。

暗灰色を呈した胎土は、不純物はみられなく、劈開面が砂鉄をかためた様なザラッとした感を受けるものである。

器面の調整は良く、特に器表面はスムーズな面を呈する。焼成は良好。同図18は表面に明瞭な条痕を有し、裏面には、櫛の成形痕が残されている。又、同面にはかすかな叩き痕が認められる。同図19の胴部片はかすかに条痕がみられ、裏面は平行文叩目が残っている。同図20は羽状の平行文叩目を表面に、裏面には格子状文叩目を施す。標品である。

同図21は、20の標品同様に表裏に叩目を施すが、表面の目はかなり明瞭に出ている。同図22は表面が無文の小破片で、裏面は格子文叩目が、深く残るものである。

これまでの須恵器の報告例に、<sup>③</sup>宮古島上ノ頭遺跡、<sup>④</sup>石垣島山原貝塚等がある。

#### (6) キセルの雁首 (第18図23) (図版25の5)

焼きしめ良好の赤褐色を呈した炻器質の雁首片である。器面は調整具による細かい面を多く有し、半光沢を呈するほどに仕上げてある。残存部の腋口側の外径1.8cm、内径7mmをなす。<sup>⑤</sup>

宮古島砂川元島遺跡の土製品に比べ、本遺跡出土のものは、かなり鉄製品に近似し、形は整っている。

#### (7) 鍋 (第18図24) (図版25の6)

平面形が長椭円を示す焼成良好の炻器で、胎土が(茶)赤褐色をおびる。長軸に巾6mmのミゾが施され、貫通した裏面の孔まで囲縫している。8mmの孔は、ミゾの状況から両端に存していたものと考えられる。

石垣島ヤマバレー遺跡から土製品の出土報告例があるが、キセルの雁首同様に、焼成、及び形態的に進んだ段階のものである。<sup>(1)</sup>

#### (8) その他

第15図8は、輪積の部分から欠落した底径が9cmを測る破片で、表裏面に不透明な灰色の釉を施してある。

疊付き部分には回転糸切り痕が残され、これまでの紹介陶器中にはみられない技法である。

第17図4は水平方向に沈線を配し、その下に「七」と判断される窯じるしを施した胴部破片で、胎土は明るい褐色を呈している。(図版27)

褐色を呈する瓦破片は20数点出土。

(上原 静)

#### (9) 土器

土器は、陶磁器の出土量に比較して相対的に少なく、総計898個得られた。いずれも細片ばかりで、器形を復元しうるものはみいだしえないが、口縁部形状から器種に壺形と鉢形とに判別され、前者がわずかに1例で、他みな鉢形の範囲に入るものを推定されるものである。

胎土には貝殻細片を主に混入しているが、石英細粒を含むものもみられ、テンバーを基準に二タイプに分類される。

Aタイプ：1mm以下の石英細粒を混じたグループで、多くは器面上に露出し、手触りがザラつく。石英のみ混入したものはほとんどなく、多少ながら貝殻微細片を含むものが普通である。

Bタイプ：白色ないし灰色の貝殻細片を混入した一群で、2～1mmの大きさのものから、1mm以下の微細片を混じるものがある。後者の器面上では横撫による調整等で消され、破損面に確認されるものが多い。又、胎土が泥質で軽く、多孔質をなすものも含まれる。

##### 壺

この器形を推察しうる標品は、第19図1(図版29の1)の1例のみである。口縁部直下から、すぐ胴がはりだす形状を示し、胎土は赤褐色の泥質で密であり、Aタイプに属する。器壁は8～9mmを算し、なめらかな面を有する。

##### 鉢 (第19図1～10、第20図1,2)(図版29の2～10、図版29左の1,2)

この器種に属するものは26例あり、第19図2～10、第20図1,2に代表的なものを現わした。

Aタイプのものに、第19図2, 3, 6がある。口縁が直口のもの5

例で、器壁が9~6mmを測り、胎土が赤褐色の泥質である。第20図1は外耳の頂部のみ褐色を残し、他面は黒色をおびている。

Bタイプの口縁は、外反を示すものが15例で、直口が2例、微弱な内轉するもの1例みられた。断面形状をみると、尖状をなすもの7例で、若干丸味をおびるもの12例である。第19図10は、外耳把手直上から、口縁部へ薄く刃状に成形し、口唇を彫によって整えたものであるが、調整は丁寧でなく波状を示し、器面には、外耳の貼付の際の指痕がかなり、明瞭に残っている。

第20図2は、前者とことなり、口唇を平坦に成形した燈褐色の口縁部片で、器面は全面に横撫がなされ、スムーズな手触である。

#### 外耳把手（第19図11、第20図1~8）（図版29の10~図版29左の1~8）

外耳把手は24例出土しているが、いずれも破損がいちじるしく完全なものは5個であった。なお、口縁部を有するものになるとわずか3例みいだされるだけである。

口縁部を有する外耳についてみると、外耳は、口縁下約1.9cmあたりから粘土の盛り上がりがあり、外耳の頂部は約2.7cm下に位置するように貼り付けられている。外耳形状は、バラエティーがあり、第19図10、第20図2、4の標品に示す丸形の凸出したネンドを貼付したグループで、第19図10は、前述したように、貼付時の指痕を残し、難な感を受けるものと同図2、4のような横彫調整の良好なものがある。

外耳の形状にさらに、前者のグループと異なる紐状の粘土を有したものがあり、その断面が三角形のものと、つり鐘状のものがみられる。第20図5、6、8は、薄手のもので外縁部に棱を有するほど平坦に調整されている。

外耳下方、胸部との接合面に隙間がみられる状態のものが、紐状外耳に多く観察された。

#### 底部（第21図、1~11）（図版30の1~7、図版31の1~4）

総数126例出土しており、その器形は全て平底で、丸底はみられなかった。

Aタイプ42個、Bタイプに属するもの84個である。底部壁は、概して胸部壁に比較し薄く成形してある。

底部から胸部への立ちあがり部は、数種見出されたが、大きくは後述の3タイプに分けられた。

第21図1、2に表わしたもので、立ちあがり部分が丸味をなし直上にのびるものと、立ちあがり部分が角を呈し、斜面上にのびるものがある（同図3~8、10）。同図8は、かなり

伏せた状態のものである。同図7はくびれをみせる。8タイプめとして、立ちあがり部分が内傾するものも同図9,11である。

色調は、外器面は橙褐～赤～黒褐色をなしうるものがあるが、内器面は、黒色をおびるものが数例をのぞいて一般的である。

#### 胸部

総計724個得られ、Aタイプ362個、Bタイプ382個であった。

器面調整は横撫手法をもちいたものが多く、手触がなめらかなものである。2～3例テンバー引きずり痕を残した破片を得たが、顯著なものは他に見出しえない。焼成は良好。

裏面には、整形による擦痕を残すもののがみられた。第19図10の裏面に、軟質の整形具による整形痕が、口縁に沿いながら上方にのびる様に残されている。

器壁は、最小0.5cmのものから最大1.5cmのものとかなりのバラエティーがある。

#### (10) 石 器(第22図1～3, 第23図1, 2, 第24図1～3, 第25図1～4)(図版32の1～6, 図版33の1～6)

調査地区は石灰岩地帯であったためか、かなりの量の礫がみられ、若干、磨面を有する礫も出土したが、今回は明らかに加工、及び使用痕が認められるものについて記述する。

石器総数12点で、全て凹石であった。発掘によるもの4点、表採品8点である。集計表を第1表に表わした。

平面形が方形状、橢円状、不定形にグルーピングされ、器面中央に1面のみに、凹を有するもの10点と多く、表裏面及び他面的使用を示すものは2点であった。

四部は、荒い打痕が観察されるものがあり、巾長径1.0cmのものから5.5cmとかなり差があり、深さも一定していない。

第22図1、第23図1、第24図3、第25の1は側面に敲打によるかえりが存し、第22図1、第23図1, 2、第24図3、長軸の端にかなり荒目の打痕が残され、第28図1は、外觀が杵状を呈し、類例が仲間第一貝塚にみられる。

同図1は、凹が表面1カ所、裏面に2カ所あり、器面は磨面を有する第23図2も本紹介資料中最も重量があり、磨り石の機能を推察させる。

同図3は柱穴より出土したもので、表裏に軽微な打痕が存する。第24図1, 2, 3、第25図2, 3, 4は不定形で、自然礫及び石器の破損部を再使用したものと考えられるものである。

(上原 錠)

# 石器集計表

第1表

番号	特徴 最大長	(cm)	最大幅	(cm)	最大厚	(mm)	重量	回の 数	凹の大きさ (cm)	凹の深さ (mm)	保存状況	出土場	石質
1	10	7.5	5.8	785	1				8.8×8.5	8.5	完	ロ-51	流紋岩
2	9.4	7.1	3.8	360	1				1.7×1.1	0.2	完	タ-13	花崗閃綠岩
3	10.6	7.4	6.0	684	2				1.0×0.8 0.9×1.5	1 1	完	柱穴	チャート
4	10.1	6.4	5.1	400	1				2.2×2.7	4.5	完	表探	石英安山岩
5	15.3	8.8	6.8	1200	1				3.5×4	2	完	ル-5	石英安山岩
6	18.8	10.8	7.7	1630	1				4×3.5	2	完	表探	安山岩
7	10.5	6.2	3.8	890	1				2×2	2	1/4	ロ-51	石英閃綠岩
8	8.2	6.7	5.7	480	1				4×3.5	4	不整形	表探	斑レイ岩
9	18.9	7.6	5.5	750	1				2.6×2.5	2	1/2	表彩	チャート
10	9.4	6.6	6.6	900	8				(表)5×4 2×1.7 (裏)2×8.5	2 1 8	1/4	表探	閃綠岩
11	10	10	5.9	180	1				4.5×5 8×8.5	2 1	完	表探	安山岩
12	10.6	9.8	7.1	1040	1				5.5×5	5	1/2	表探	花崗岩

※ 石質の同定は沖縄県立博物館学芸員大城逸郎氏による。

## (11) 貝製品

平若東遺跡出土の貝製品は、わずかに1点を数えるのみで、シャコガイ製の鐘とされるものである。(第21図12)。東地区、石灰岩基盤で囲まれた微高地マウンド内からの表探によるものである。(図版26の7)。

### 貝鐘

ヒメジャコの殻頂部を穿孔した貝製品である。孔径の大きさは、短径1.2 cm、長径1.4 cmのやや不整形の長円形である。重量148 g、殻長11.0 cm、殻高7.0 cm。

内側からの簡単な穿孔によるものと思われ、外表殻頂部には穿孔の際にでき

た小さな荒い剥離痕を残し、比較的粗雑な孔が形成されている。孔径は、内外側部分ともに研磨痕は見られない。外表殻頂部は著しい磨滅痕を残し、風化痕類似の小穴ができる。外表殻の両端は、放射肋間に磨滅し、なめらかである。

また、内縁歯状にも若干の磨滅痕が観察できる。

貝錘は、從来網の錘に利用されたものとして考察されてきた。特にシャコガイ製錘の場合は、沖縄貝塚時代後期において普遍的に出土し、地域的な変化を示し、陶磁器出土遺跡の時期まで、量的な変化を伴ないながら出土してくる。

後期のシャコガイ製錘は、大きさ、質量などの変化から、網の規模の拡大や網漁の拡大、日常的労働手段の一つとして、網漁撈活動の展開が普遍化されたものとして指摘されてきた。

貝錘の出土状況を、これまでの他の遺跡の中から追ってみると、いずれも数量的に微弱な出土状況を示すか、もしくは、小範囲において一括して、まとまって出土した報告例を聞かない。

本遺跡出土の貝錘も、表探によるものであり、数量的にも1点というには、余りにも少なすぎる感がある。

網との関連で想定的に捉えてみた場合、1点の出土というのは、漁網錘用途の可能性を断定するのに困難である。

貝錘（シャコガイ製）＝漁網錘用途を断定するのに、本遺跡類似の他の遺跡において、もしくは、普遍化した後期の貝塚において、まとまった資料増補をまちたい。

なお、最近、二・三の遺跡において、明らかに埋葬されたと思われる人骨に、シャコガイ殻頂部に穿孔された、いわゆる貝錘が共伴して出土している興味ある新しい資料も出土している。

（大城 慧）

(12) 自然遺物

貝類

海産貝類

[マルスダレガイ科]

- ①アラスジケマンガイ
- ②スノメガイ
- ③スダレハマグリ
- ④ユオウハマグリ
- ⑤リュウキュウアサリ

[ザルガイ科]

- ⑥カワラガイ
- ⑦ナガザルガイ

[チドリマスオガイ科]

- ⑧インハマグリ

[ニッコウガイ科]

- ⑨モテツキザラ

[フネガイ科]

- ⑩サルボウ
- ⑪リュウキュウザルボウ

[アフガイ科]

- ⑫リュウキュウマスオ

[イタボガキ科]

- ⑬イワガキの一種

[ウミギク科]

- ⑭イソガイの一種

[タマキガイ科]

- ⑮タマキガイ

[シャコガイ科]

- ⑯シラナミ
- ⑰ヒレジャコ
- ⑱シャゴウ
- ⑲ヒメジャコ

Family Veneridae

- Tumidum (Roding)
- Periglypta Puerpera (Linne)
- Katelysia (Hemitapes) japonica (Gmelin)
- Sulfureum Pilsbry
- Tapes Literata (LINNE)

Family Cardiidae

- Fragum uneda (Linne)
- Vasticardium enode (sowerby)

Family Mesodesmatidae

- Atactodea striata

Family Tellinidae

- Cyclotellina remies (Linne)

Family Arcidae

- Anadara (Scapharca) subcrenata (Lischke)
- Andara maculosa (REEVE)

Family Psammabidae

- Psammataea elongata (LAMARCK)

Family Astraeidae

- Crassostrea nippona (SEKI)

Family Spondylidae

Family Glycymeridae

- Glycymeris vestita (DUNKER)

Family Tridacnidae

- Tridacna (Vulgodacna) noae (RODING)
- Tridacna (Flodacna) sguamosa LAMARCK
- Hippopus hippopus (LINNE)
- Tridacna (Chametrachea) crocea (LAMARCK)

- ⑩オオジャコ  
 (イモガイ科)  
 ⑪ヤナギシキリイモ  
 ⑫クロミナシ  
 ⑬コマダライモ  
 ⑭アンボンクロザメ  
 (スイショウガイ科)  
 ⑮ネジマガキ  
 ⑯マガキガイ  
 ⑰クモガイ  
 (タカラガイ科)  
 ⑱アミナダカラ  
 ⑲ホシダカラ  
 ⑳ハナビラダカラ  
 (リュウテン科)  
 ㉑チョウセンザエ  
 ㉒チョウセンザエのふた  
 (カタベダマシガイ科)  
 ㉓カタベダマシガイ  
 (ムシロガイ科)  
 ㉔キヌボラ  
 (アマオブネ科)  
 ㉕アマオブネ  
 (オリイレヨウバイ科)  
 ㉖ヒメオリイレムシロ  
 (ウグイスガイ科)  
 ㉗アコヤガイ  
 (オニコブシ科)  
 ㉘オニコブシ  
 (ニシキウズ科)  
 ㉙ムラサキウズ  
 ㉚ニシキウズ  
 ㉛ギンタカハマ
- Tridacna (Flodacna) sguamosa (LAMARCK)  
 Family Conidae  
 Rhizoconus miles (LINNE)  
 Conus bandanus (HWASS)  
 Virroconus chaldeus (RODING)  
 Lithaconus litteratus (LINNE)  
 Family Serombidae  
 Gibberulus gibberulus gibbosus (RODING)  
 Conomurex luhuanus (LINNE)  
 Lambis (Millepes) Scarpis (LINNE)  
 Family Cypraeidae  
 Arabica scurra (GMELIN)  
 Cypraea tigris LINNE  
 Monetaria annudus harmandiana (ROCHEBRUNE)  
 Family Turbinidae  
 Turbo (Marmorostoma) argyrostomus  
 Family modulidae  
 Modulus tectum (GMELIN)  
 Family Nassariidae  
 Reticunassa japonica (AADAMS)  
 Family Neritidae  
 Thliostyra albicilla (LINNE)  
 Family nassariidae  
 Nassarius costatus (AADAMS)  
 Family Pteriidae  
 Pinctada martensii (DUNKER)  
 Family Vasidae  
 Vasum aramicus (LINNE)  
 Family Trachidae  
 Trachus stellatus GMELIN  
 Trochus maculatus LINNE  
 Tectue pyramis (BORN)

⑫サラサバティ	<i>Tectus (Rachia) niloticus maximus</i> (PHILIPPI)
〔タケノコカニモリ科〕	Family Cerithiidae
⑬オニノツノガイ	<i>Cerithium nodulosus</i> (BRUGUIERE)
〔イトマキガイ科〕	Family Fasciolariidae
⑭コイトマキボラ	
〔フジンガイ科〕	Family Cymatiidae
⑮ホラガイ	<i>Charonia tritonis</i> (LINNE)
陸産貝類	
〔オナジマイマイ科〕	Family Bradybaenidae
⑯オキナワウスカワマイマイ	<i>Bradybaena Bradybaenoides</i> despecta (SAWERBY)
〔ヤマタニシ科〕	Family Cyclopholidae
⑰オキナワヤマタニシ	<i>Cyclophorus turgiadus</i> Pfeiffer

上記のように貝類は、海産・陸産を合わせて47種に同定できた。数量的に二枚貝が多く出土しており、巻貝は少ない。

二枚貝では、アラスジケマンガイが最も多く、次にユオウハマグリ、イソハマグリと続く。さらにシャゴウ、ヒメジャコ、ヒレジャコ、シラナミガイ等のシャコ貝の類が含まれる。

巻貝では、マガキガイが最も多く、コイトマキボラと続く。

陸産では、わずかに二種を数えるのみであり、数量的にも少ない。

本遺跡は、広大な範囲にわたって遺物が散布しており、何ヶ所かにテストピットを設けたが、他の人工遺物同様、自然遺物についても、全体的な遺物の出土量は少ない。特に貝類等が、集積して出土することはなく断片的な出土である。広大な面積と、眼前数百メートルに海をひかえながら、自然遺物等の出土量が少ない。

本遺跡出土の自然遺物等からは、多く考察することは困難であった。本来の包含層が、わずかに断片的に残されているだけで、20~80cm下で、岩盤、地山上に到達する状態であり、従って1グリットに含まれる貝類の量も、微量にすぎない。

このような状況の中に、食料嗜好の対象が、特にどの貝類に集中しているという統計的考察はできない。

このほか、微量ではあるが、魚骨、脊椎の一部と思われるものや獸骨等も出土しているが、同定できなかった。獸骨には、イノシシのキバと思われるものが含まれている。

注：なお、～貝の一種としてあるのは、遺物が表面磨耗度が激しく、表殻の色彩を見きわめることができるものと細片であるため、種別が判然としないものを含んでいる。

また、重量、個体数についても、統計を出すことを省略した。

(大城 慧)

### 参考文献

- ①砂川元島遺跡発掘調査概報 砂川元島遺跡調査団 1975年
- ②八重山石垣島平得仲本御嶽遺跡 沖縄県教育委員会 1976年8月
- ③宮古島上ノ頂遺跡遺跡調査概報 「琉大史学」第4号 1978年
- ④石垣島山原貝塚 「沖縄八重山」 流口宏編 1960年
- ⑤ ①に同じ
- ⑥石垣島ヤンバレー遺跡発掘調査概報 ヤンバレー遺跡調査団 1977年
- ⑦仲間第一・二および平西貝塚 ④に同じ

## VII おわりに

以上において、各章ごとに遺跡の立地、環境、さらには出土した遺物について、報告と若干の考察を述べてきた。詳細は、各章においてまとめてきたので、本章では省略する。

本遺跡は、かなり広範囲にわたって遺物が散布していたことが表面探集の結果から確認された。しかしながら、遺跡全体にわたって大きな石灰岩岩塊が露出し、本来の包含層は残っていない、岩塊の隙間に、わずかに黒色土層が入っており、大半は搅乱であった。

地表下 20~30cm 下で石灰岩、岩盤に達し、遺物の出土状況はきわめて悪かった。

今回報告する竿若東遺跡の出土品は磁器に若干古いものが含まれるが、全体的にみて、平得仲本遺跡、カンドウ原遺跡の各遺跡の時期とほぼ同一の時期に入るものであろう。

ここでは、二、三の遺跡と比較検討しながら、竿若東遺跡を考察してみたい。まず出土した遺物の中では、磁器、陶器、土器、石器、貝製品などがあげられる。磁器に数点古いタイプ(<sup>14</sup>C)のものがあり時期的な幅があったものかどうか検討を要するものであろう。生産地をみると、中国系、南方系のものが主流で小破片が多い。

黒褐釉陶器は出土遺物中最も多量に得られたものであるが細片化が著しく、復元しうるものはなかった。胎土は、大まかに、瓦質、須恵質、炻器質に分けられる。口縁形状をみると 6 タイプに分類することが出来、それらの多くは、カンドウ原遺跡、平得仲本遺跡に類似品をみいだし得る。壇付部に離形剤の附着痕を残すものが多い中で 1 例、回転糸切痕を有するものがあった。従来、南蛮と総称したものも含んでいるが、明らかに沖縄產とみなしうるものもはいっている。

日常生活品としての摺鉢には、櫛目工具及び成形手法に相違するものが認められ、それらが用途の違いなのか、窯及び時期的な違いなのか判断されず、今後注意してみたい。

須恵器は広範囲の調査にもかかわらず、わずかに 6 点の出土で、陶磁器に比べると極少の状況を示しており、その出土量と、生産地及び生産時期にまだ問題を残している。

土器は 898 点と量的には少なく、復元可能なものはなかった。器形は鉢形が

主体を占め、壺形とみなされるものは1例だけであった。陶土中には、石英細粒を混入するもの（Aタイプ）と貝殻細片を混ぜるもの（Bタイプ）の二タイプ認められた。外耳は完形品はほとんどなく、多くが欠損しているため、外観で、凸状外耳と、紐状外耳に分けてある。底部はすべて平底で、丸底の類は1例も検出されなかった。

石器としてはすべて凹石のみで、石斧等その他の器種は出土しなかった。

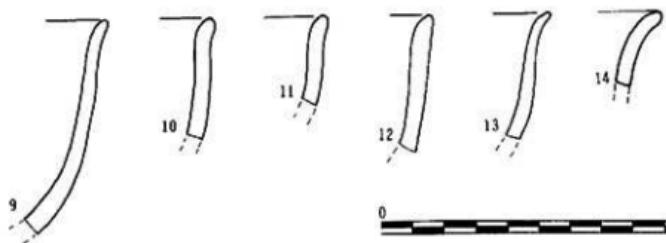
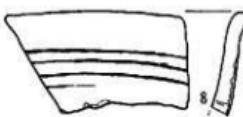
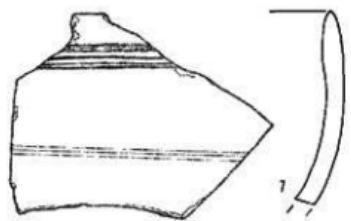
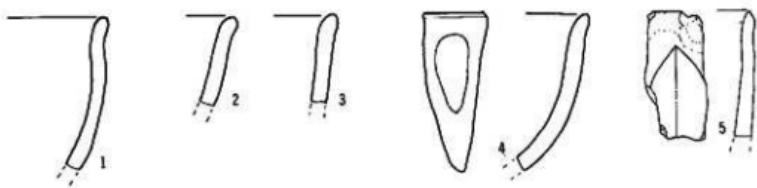
次に遺構の点では、畠地内から柱穴の検出があつただけで、砂川元島遺跡や、平得仲本遺跡では石敷が検出されているが、それと類似するプランは検出されなかつた。山原貝塚では、石塊を並べた石組が発見され、石垣のようであったと報告されているが、竿若東遺跡においても確然とはしないが、石灰岩塊が微高地マウンドに、ほぼ梢円状に広がっている地点があったが、これが住居跡の関連で捉えられるものかどうか判断つかなかつた。

また一部分において、小さな石塊が寄せられた部分があり、これが人為的なものか、自然的な集積なのか、判断できなかつた。なお、この石塊の集積されたなからも陶磁器片が採集されたことも留意すべきであろう。

畠地部分内から検出された柱穴は、平均した円形とその配列状態から判断して、なんらかの構築物の跡であったと考えられる。残念ながら、本地点のプランにおいては、調査の中途中において壊滅し、本来の性格については、詳細に論じることはできなかつた。以上のような結果にもとづくと、本遺跡の時期は、今回の発掘調査における陶磁器から推察してほぼ中心となる時期が15～16世紀の頃と考えるが、前述したごとく中に古いタイプのものがあることにより、最初の遺跡の形成から時間的な幅があったとも考えられる。

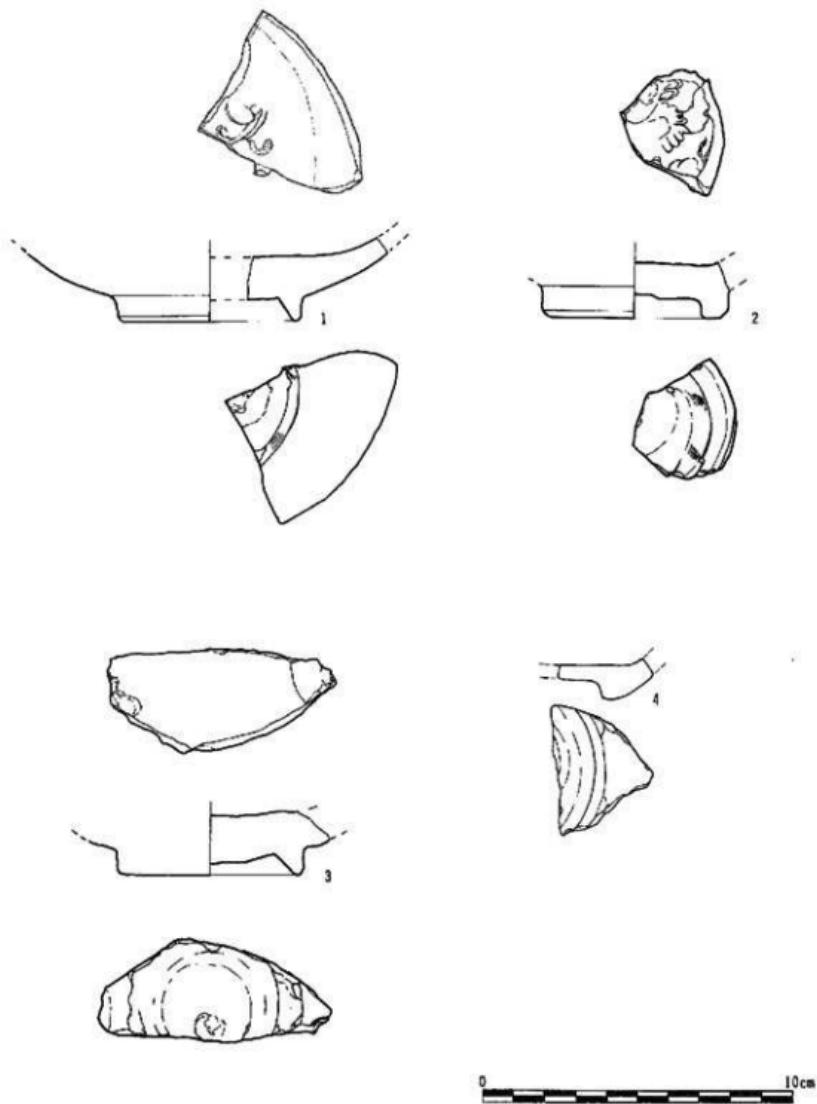
（大城・上原）

# 図 版

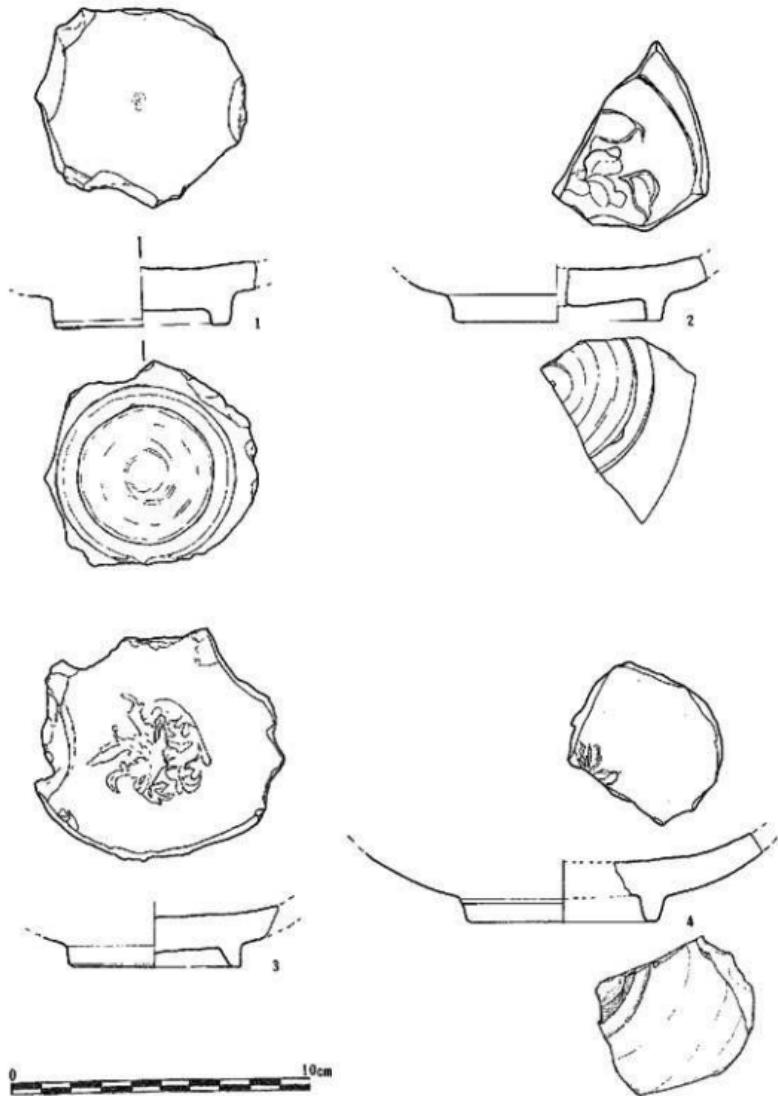


0 10 cm

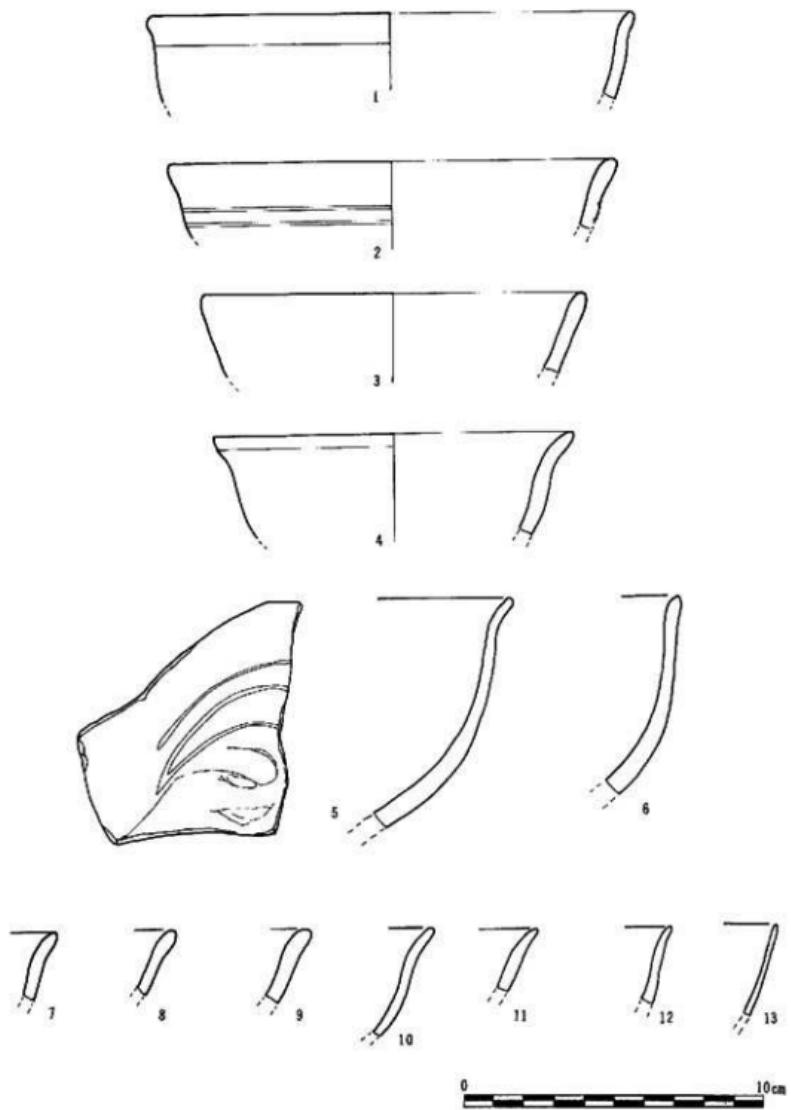
第5図 青磁器(1b類, IIa類)



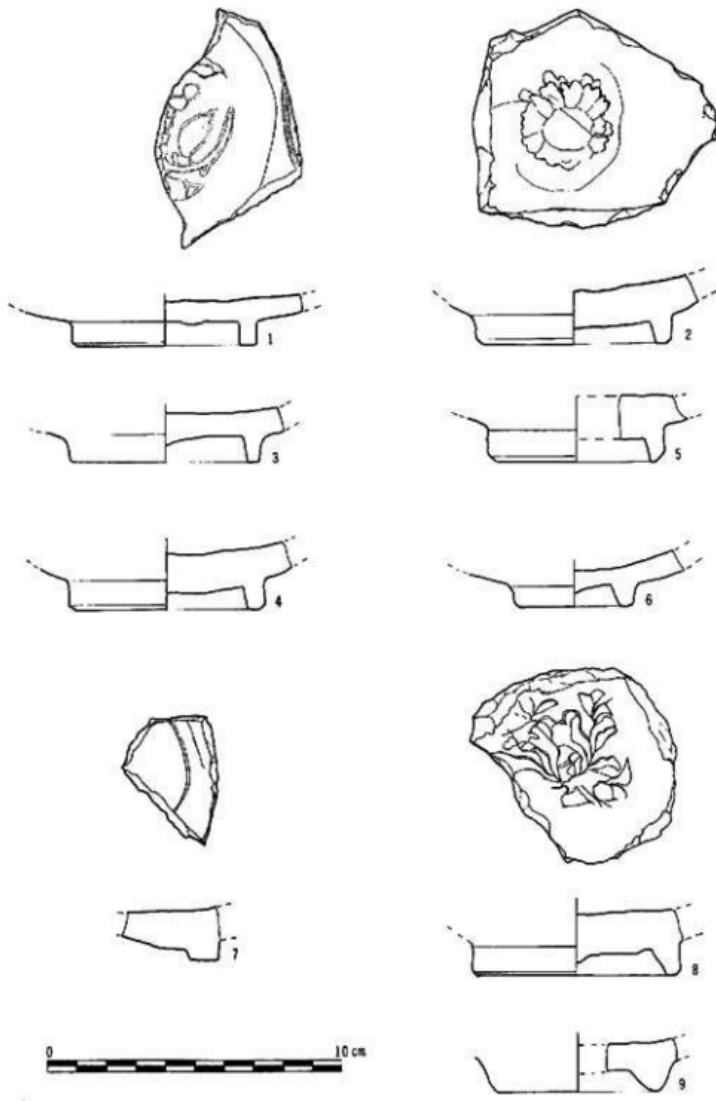
第6図 青磁器(Ⅱa類)



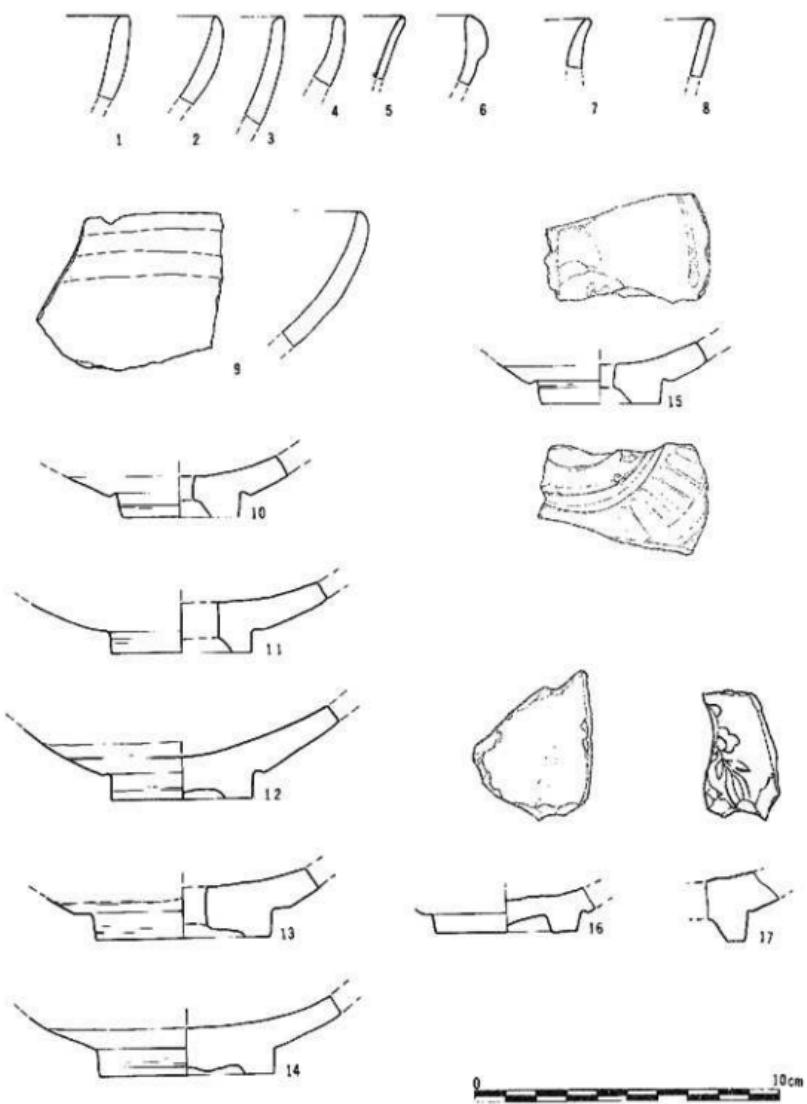
第7図 青磁器(IIa類)



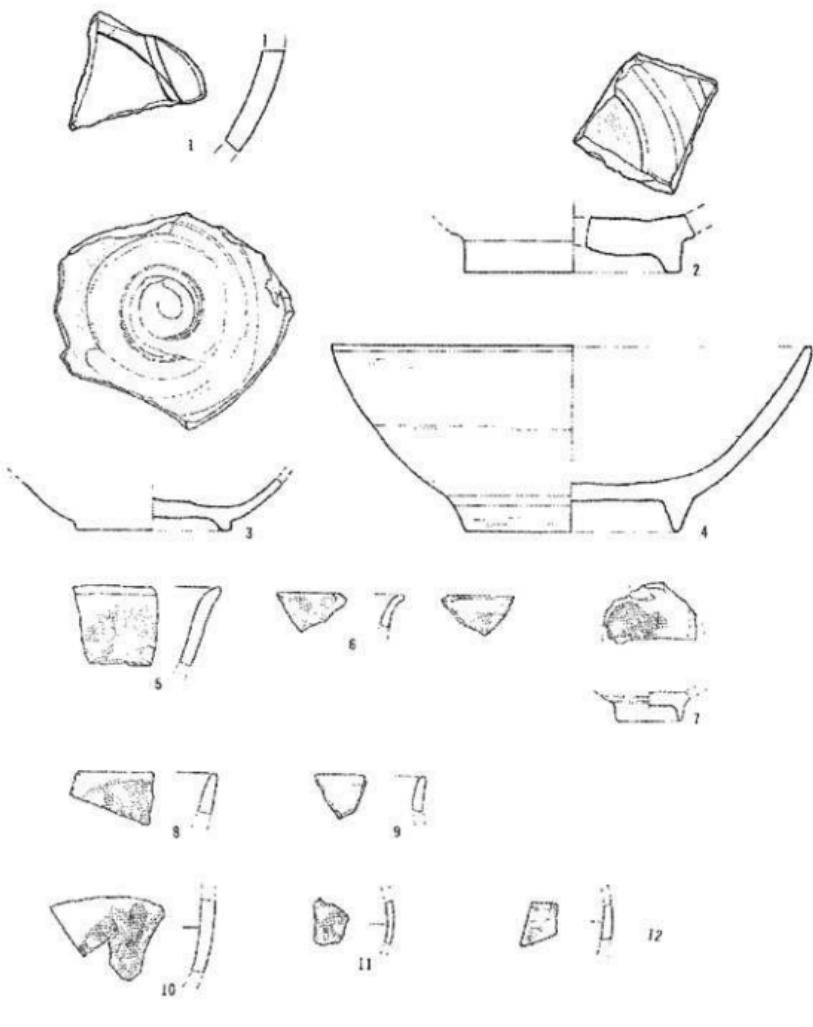
第8図 青磁器(II b類, III類, IV類)



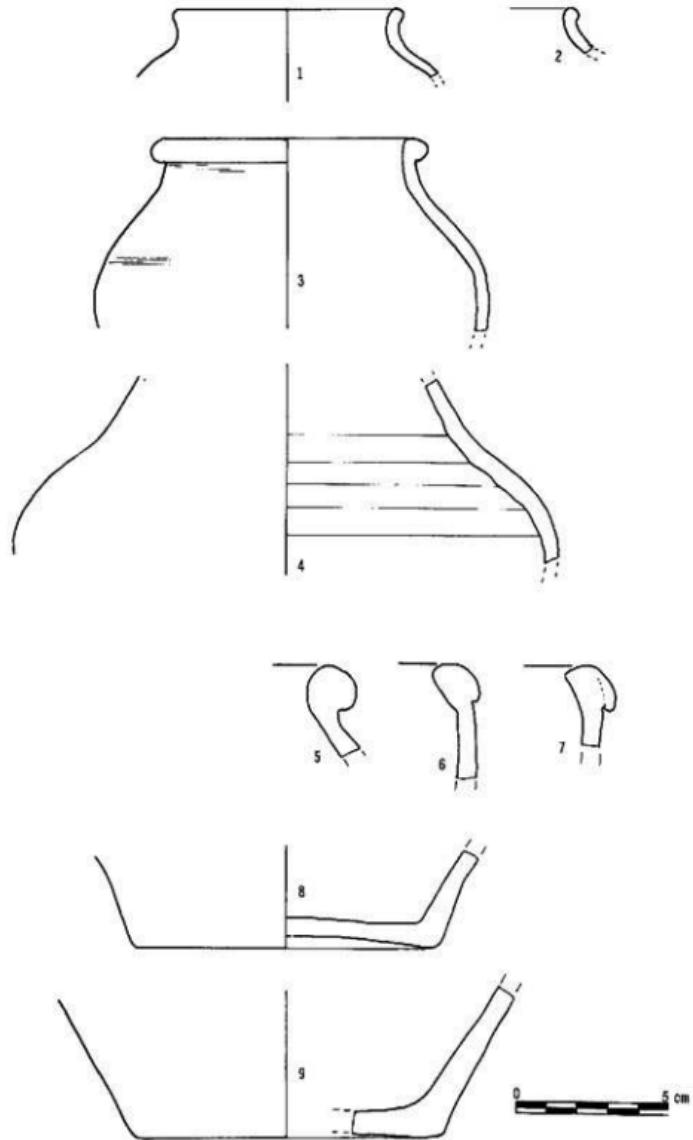
第9図 青銅器（II b類, III類, IV類, V類）



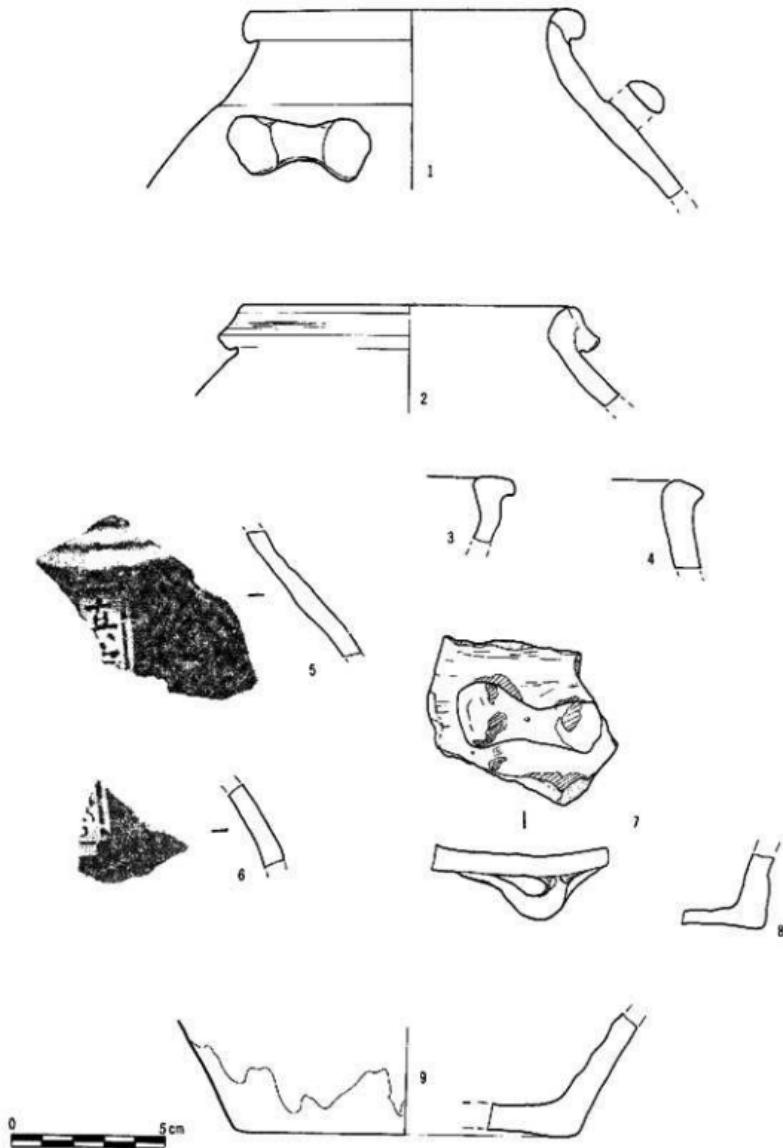
第10図 白磁器(工類)



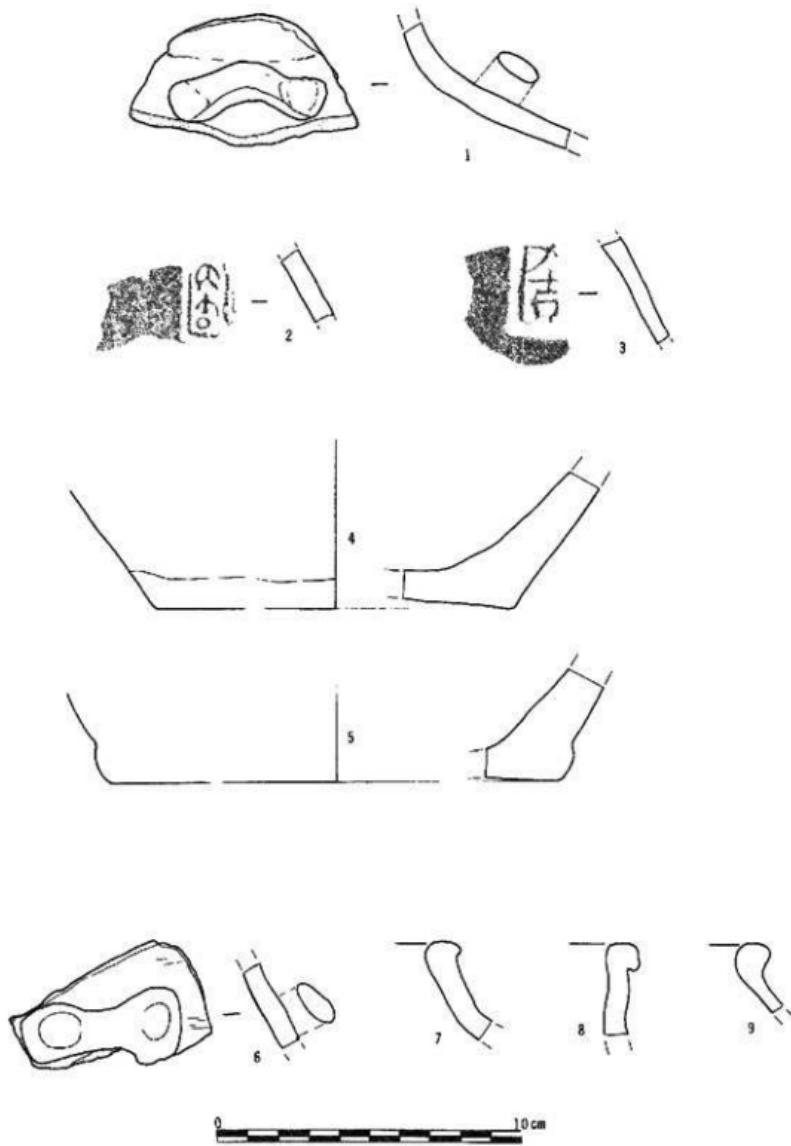
第11図 白磁器 染付 ( II類, III類, IV類, V類, 染付 )



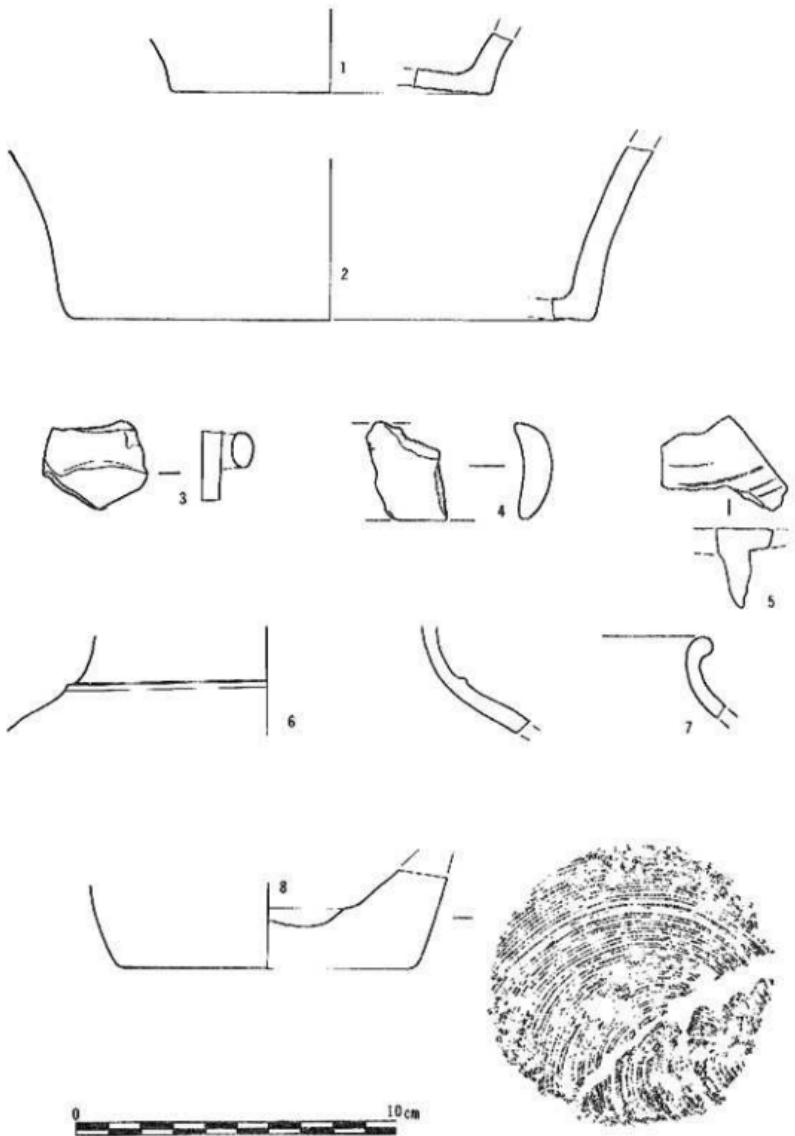
第12図 胸器



第13圖 陶器

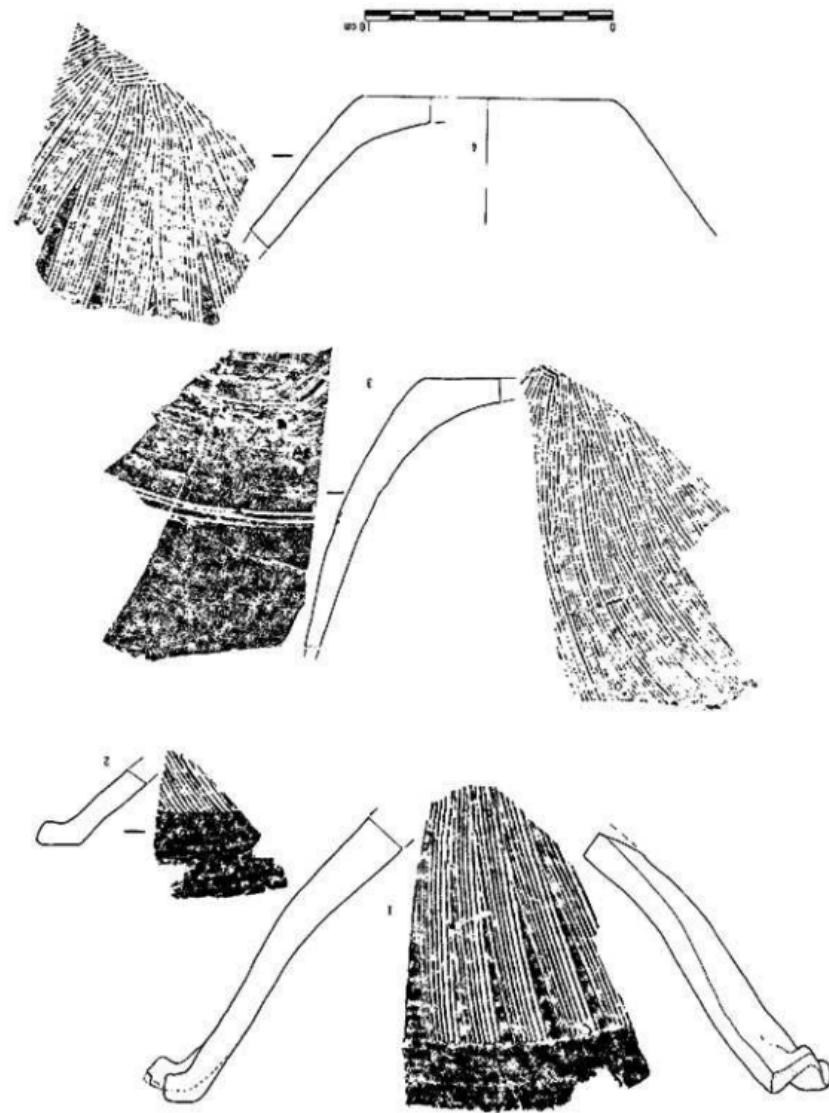


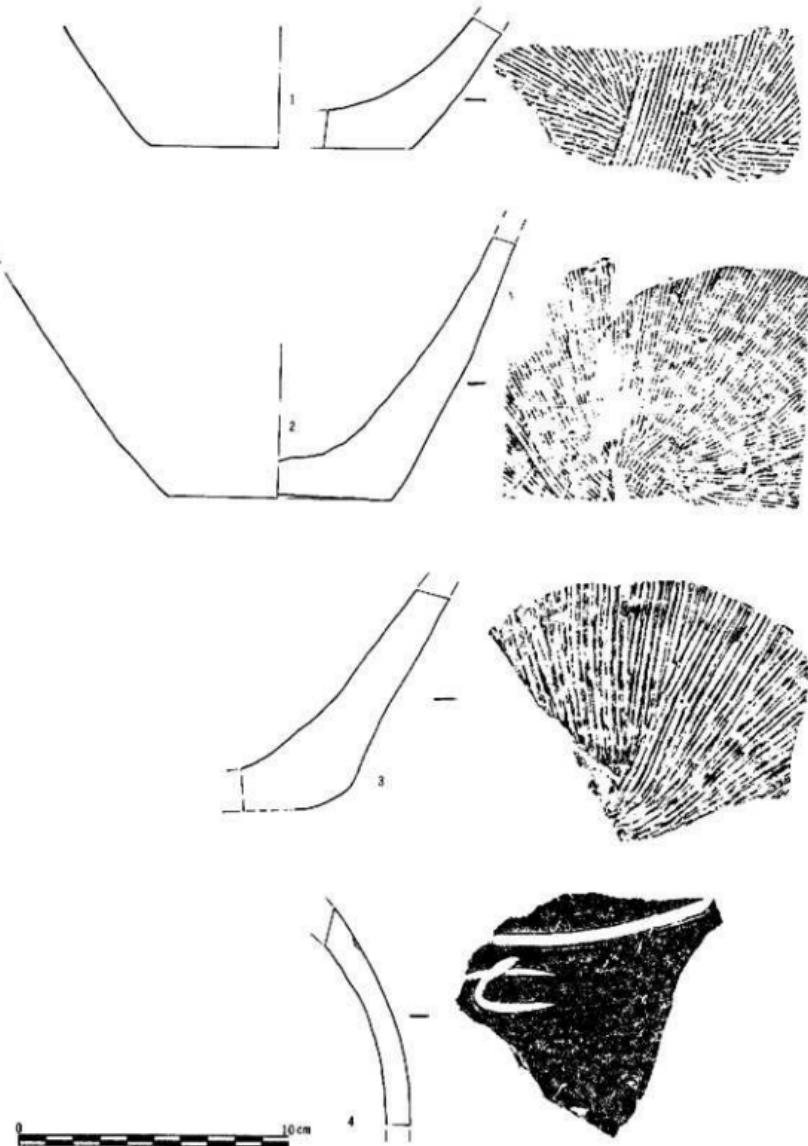
第14図　陶器



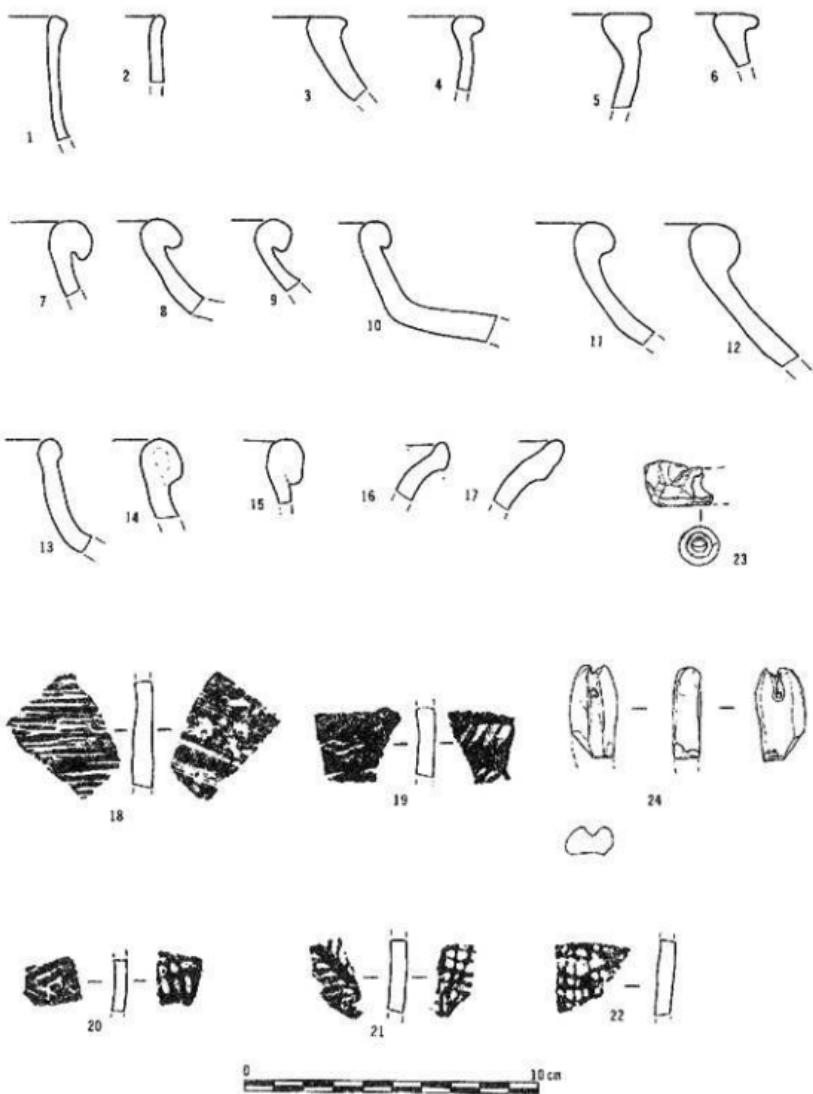
第15図 開 剖

(特器) 器 開 圖 91

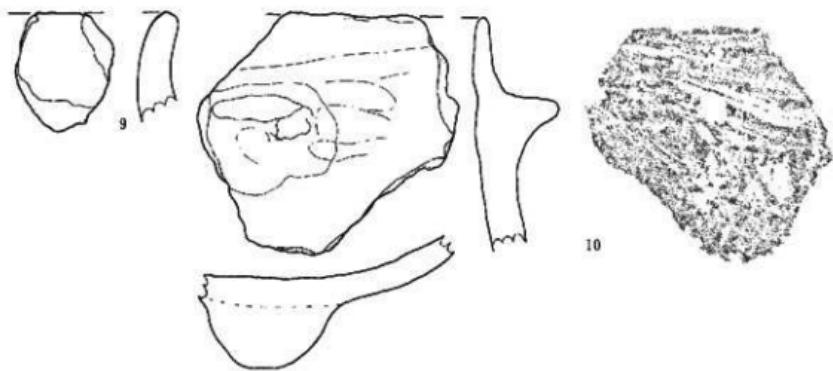
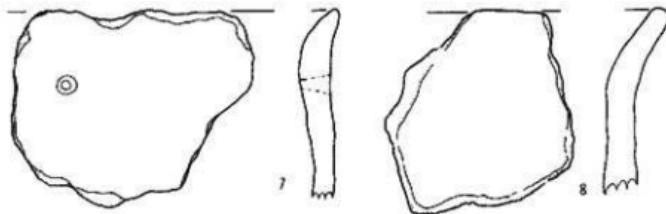
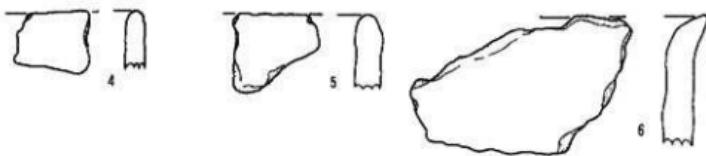
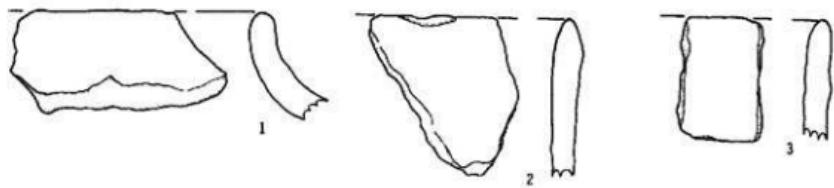




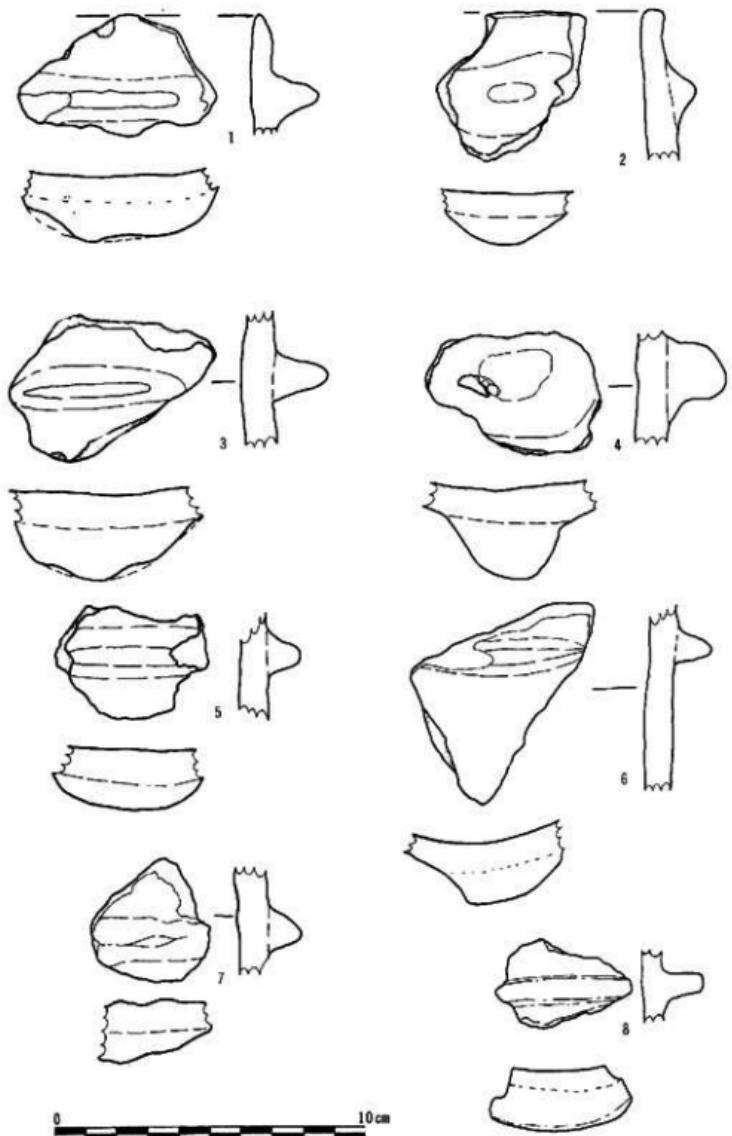
第17図 陶器（指鉢、窯印を有する陶片）



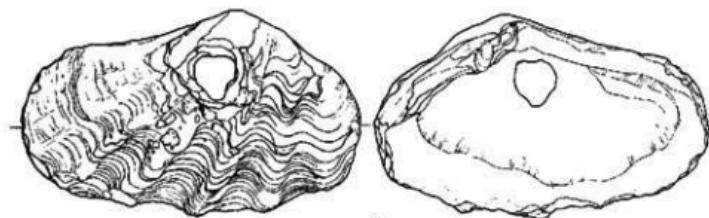
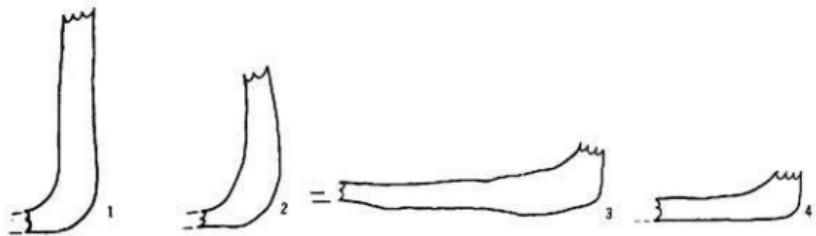
第18図 陶器、須恵器



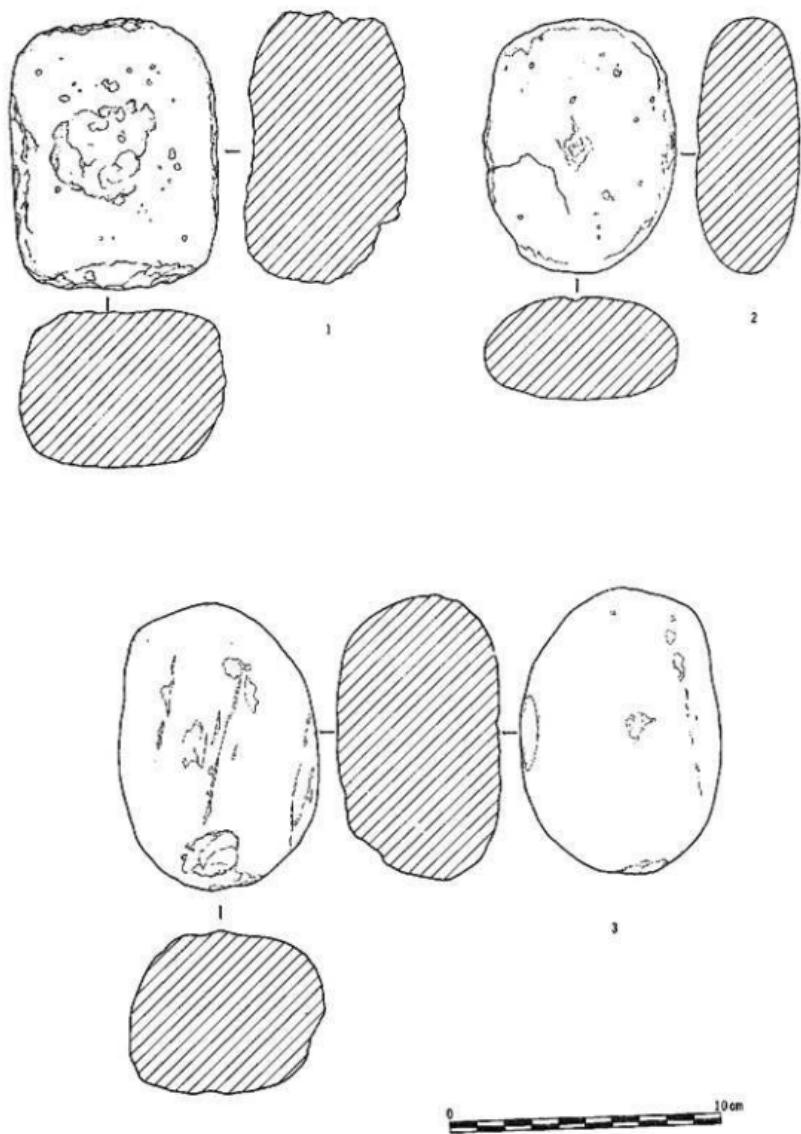
第19図 土 器



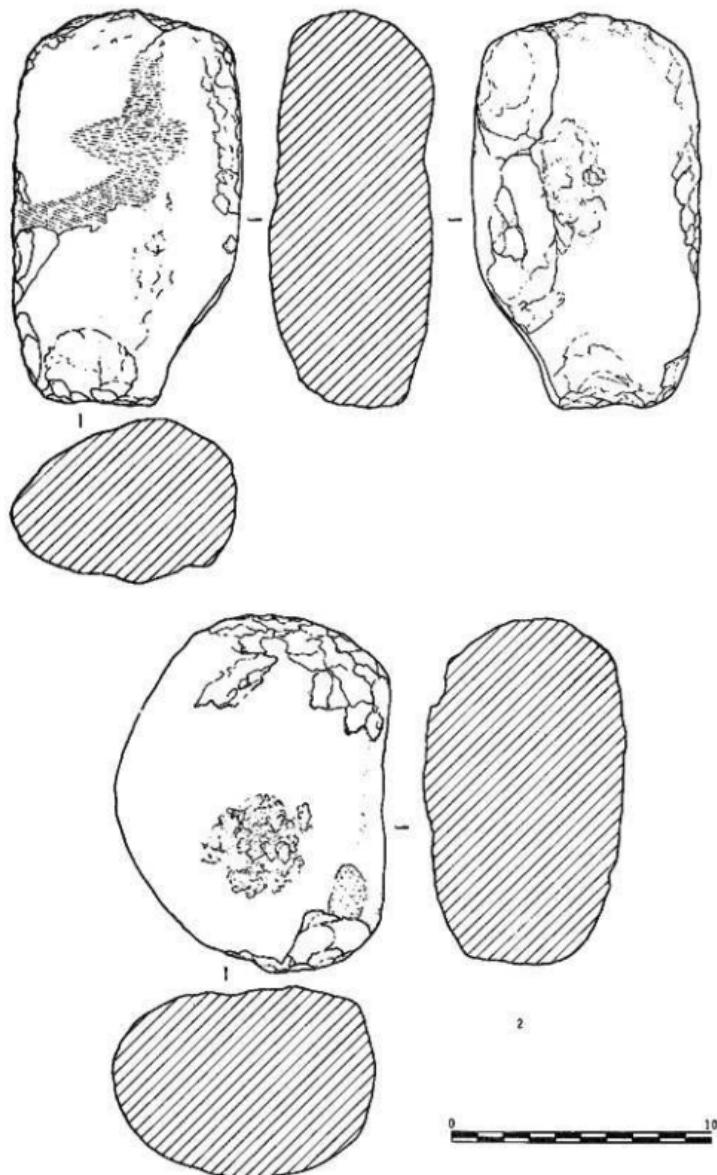
第20図 土 器



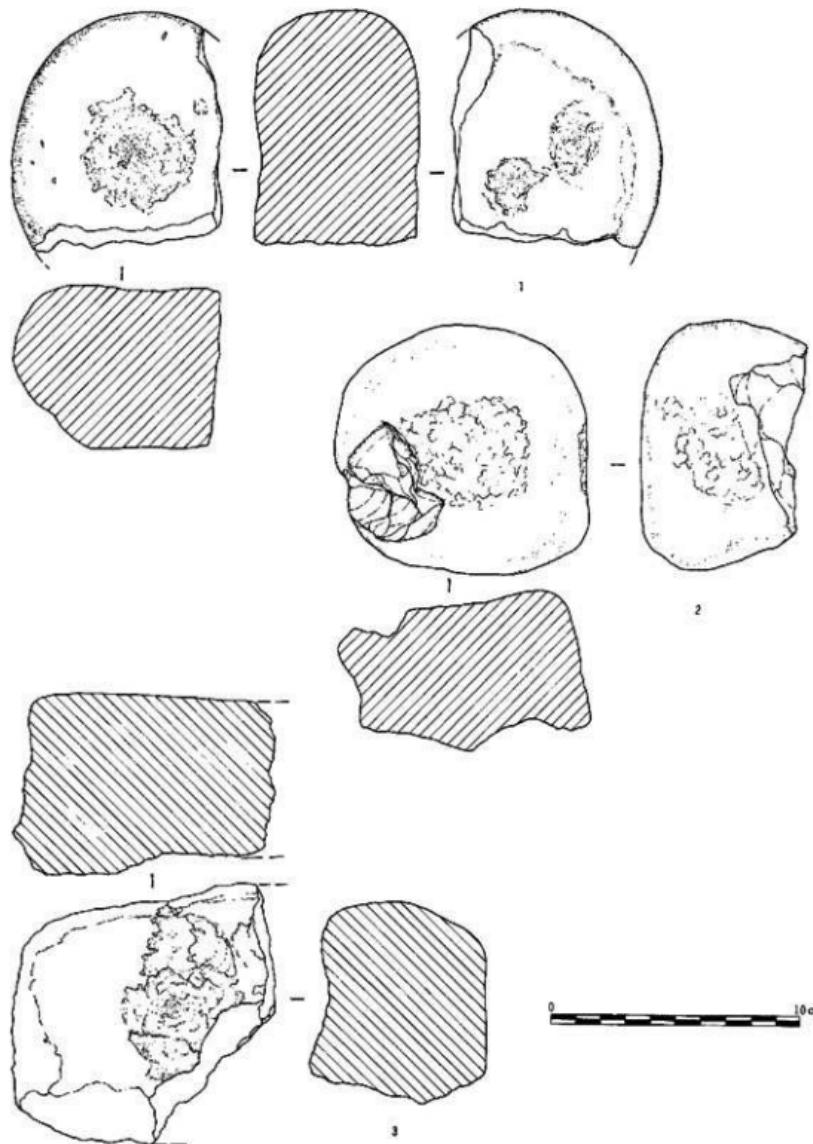
第31図 上器・貝製品



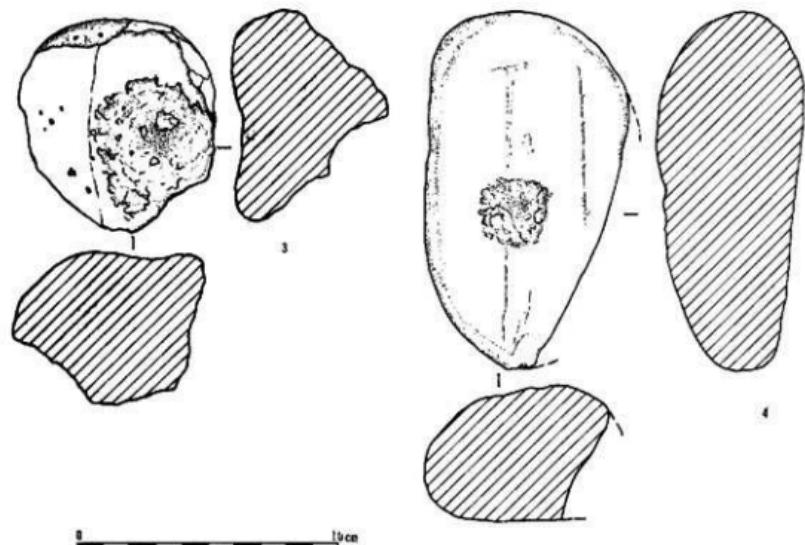
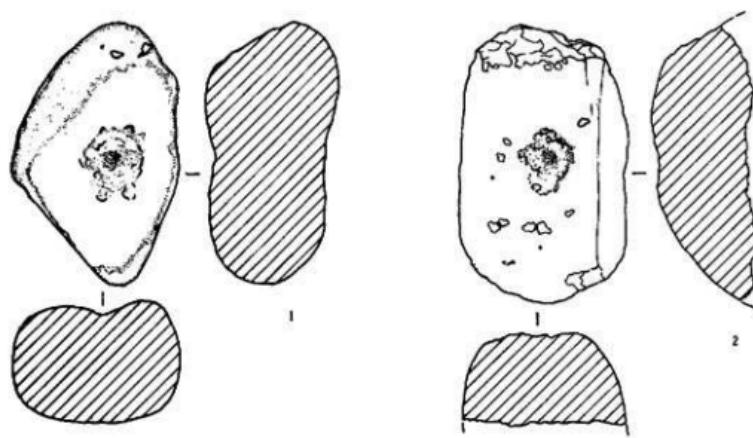
第22図 石 器



第23図 石器



第24図 石器



第25図 石器

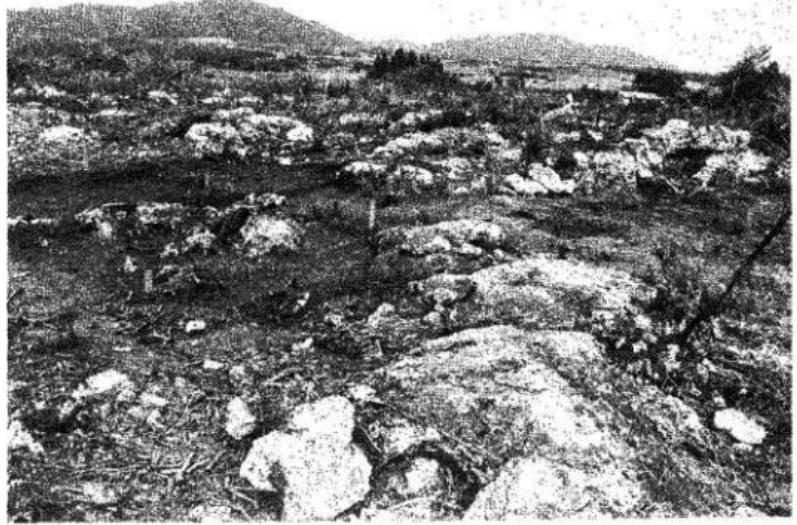


遺跡全景（南から）



図版 1

遺跡全景（北から）  
遠望されるのは竹富島



図版2

上・下、石岩岩散高地の様相  
(東地区)



西地区（近景）



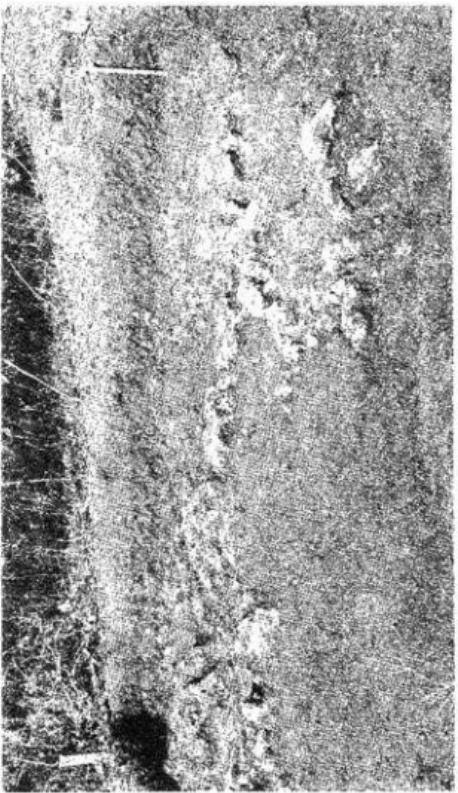
図版 3

西地区 発掘完了グリットの様相

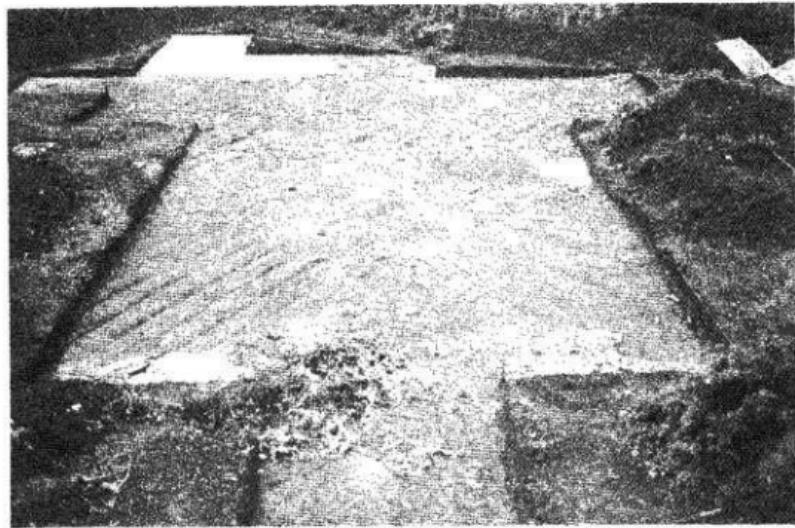
東地区・発掘完了・グリットの様相



東地区・発掘完了・グリットの様相

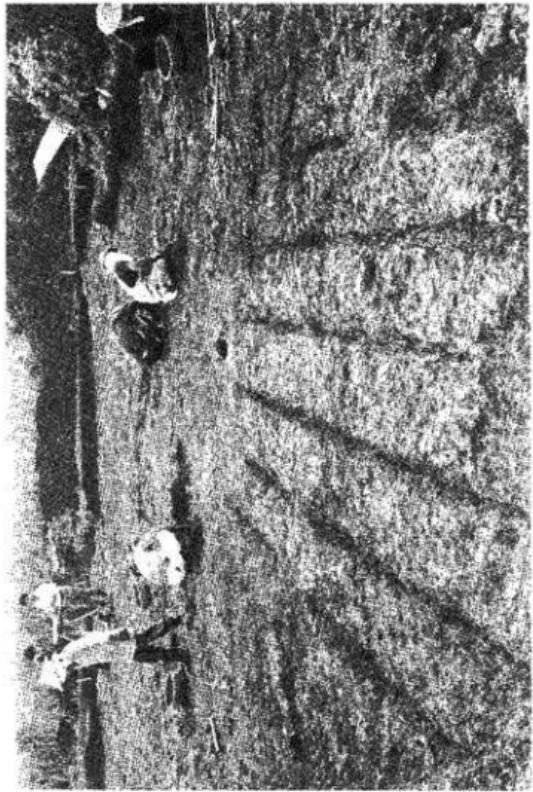


図版4



図版 5

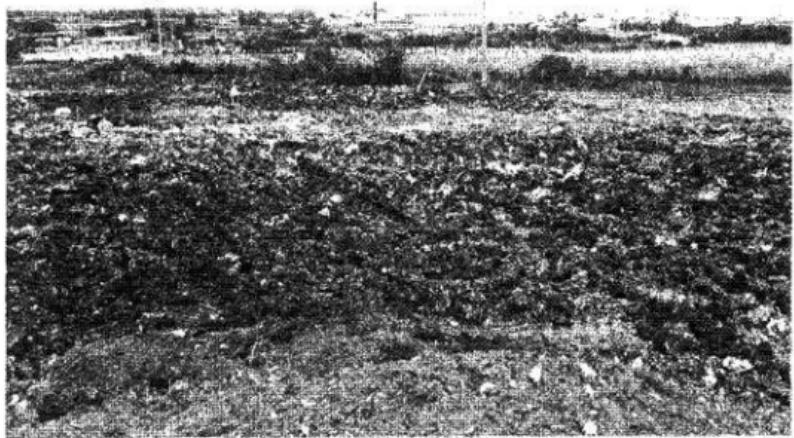
上. 烟地区. 発掘前の様相  
下. . . . 発掘後の様相



烟地区・発掘状況



烟地区  
柱穴の様相

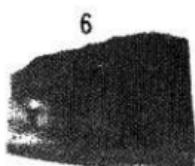
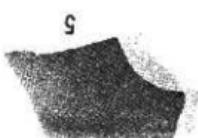


調査を待たず消滅した畠地区



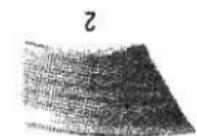
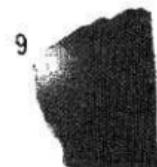
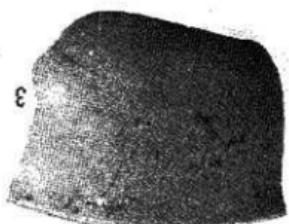
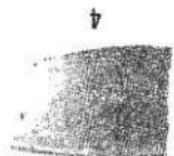
消滅した竿若東遺跡  
南から遠望

図版 7

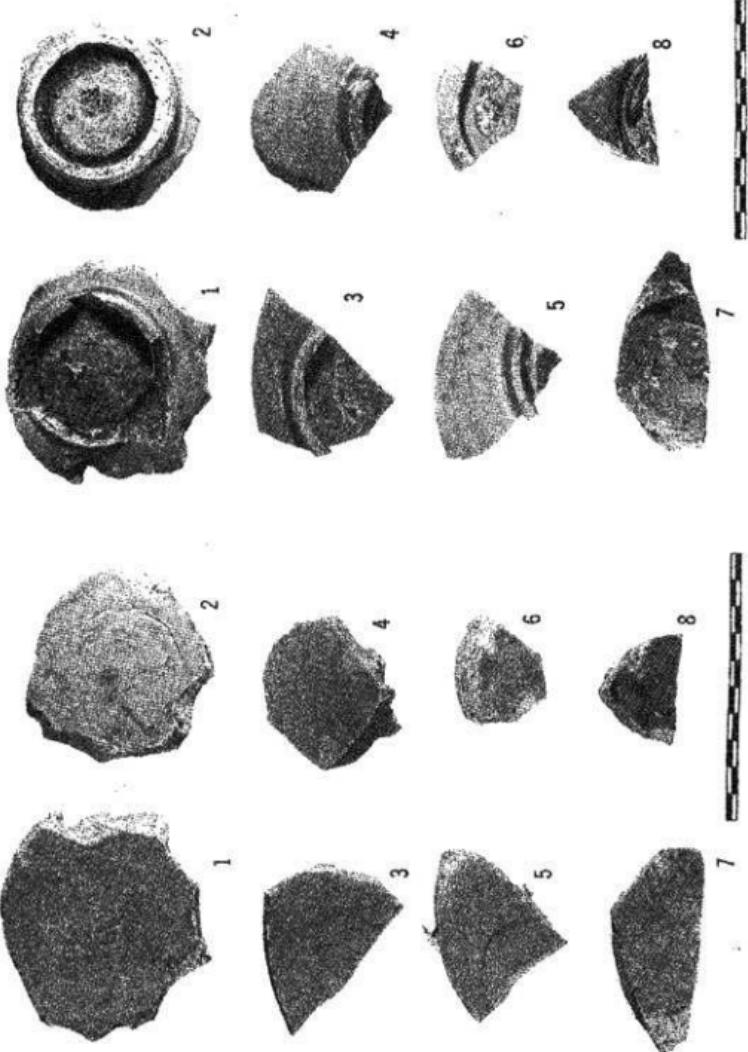


器  
物

圖  
八



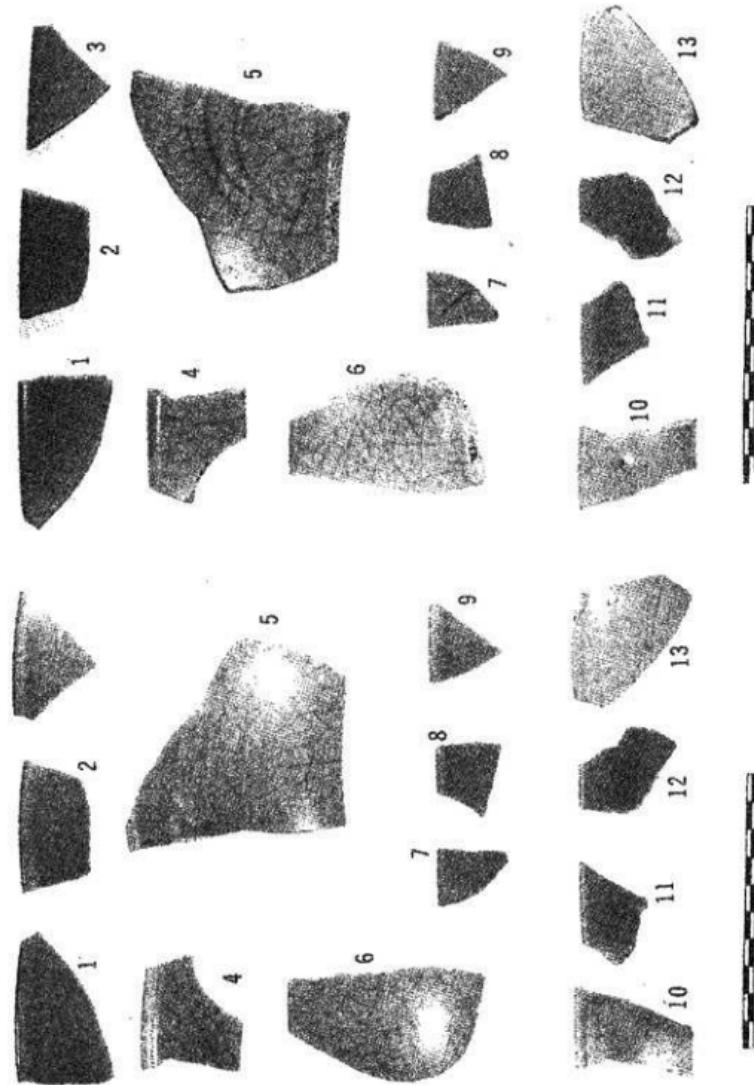
高台裏



見込ノ

図版 9 青磁器

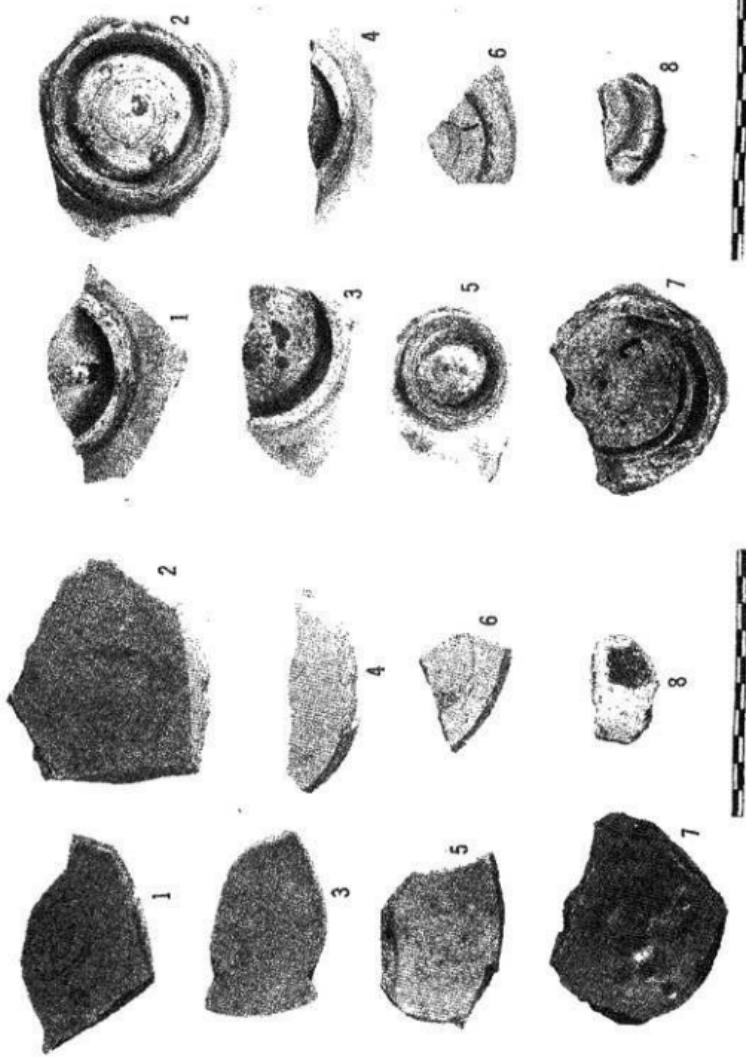
表



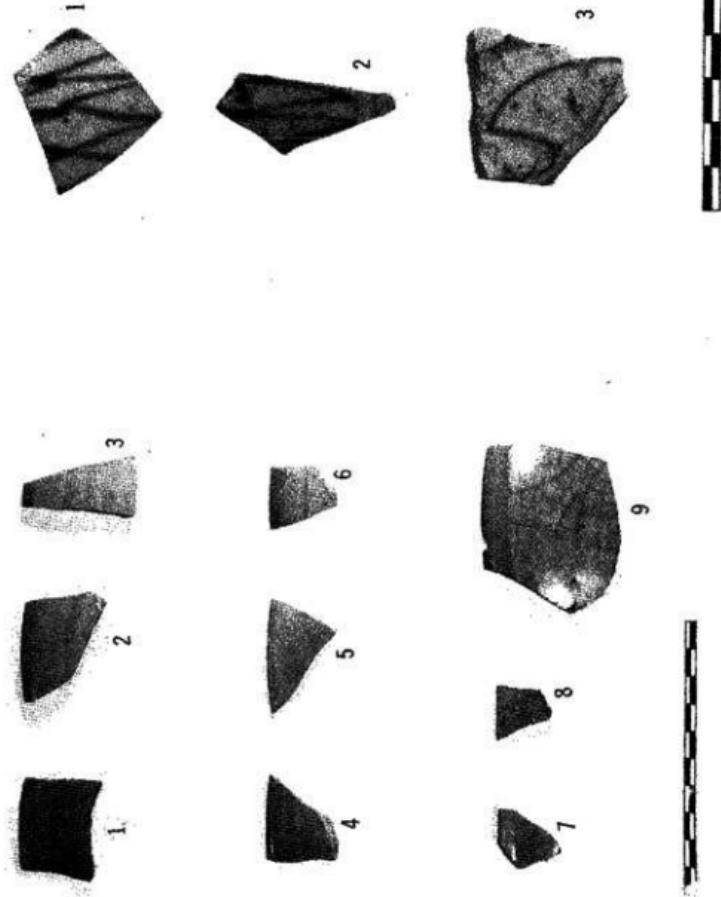
圖版 10 青磁器

高台裏

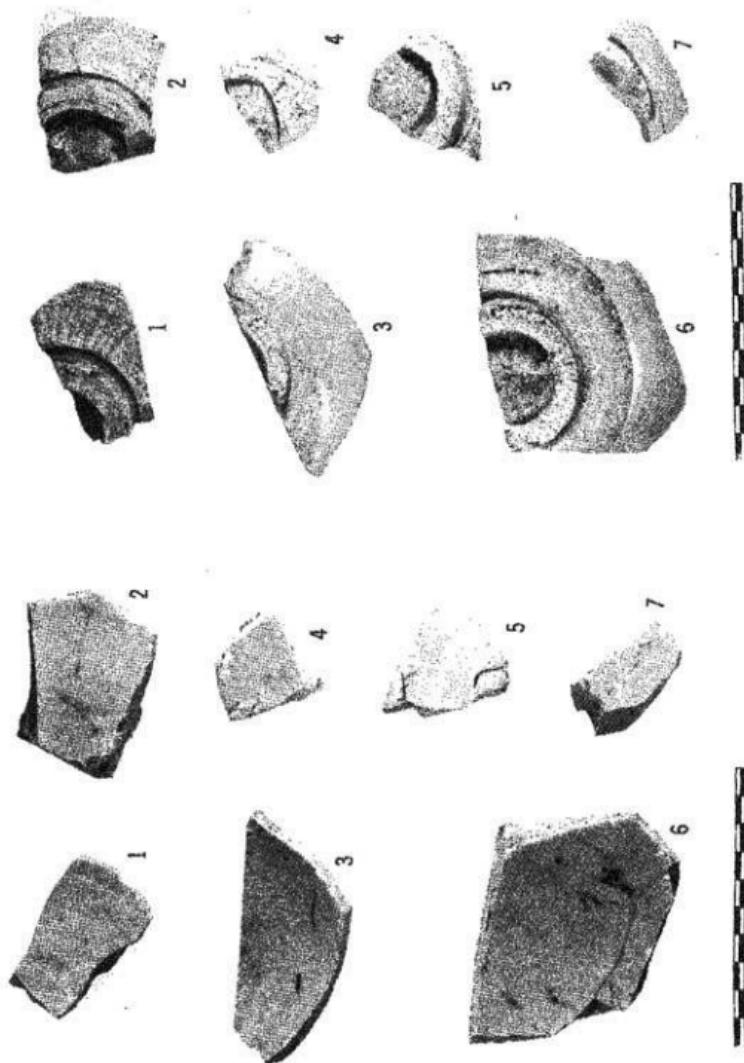
見込ノ



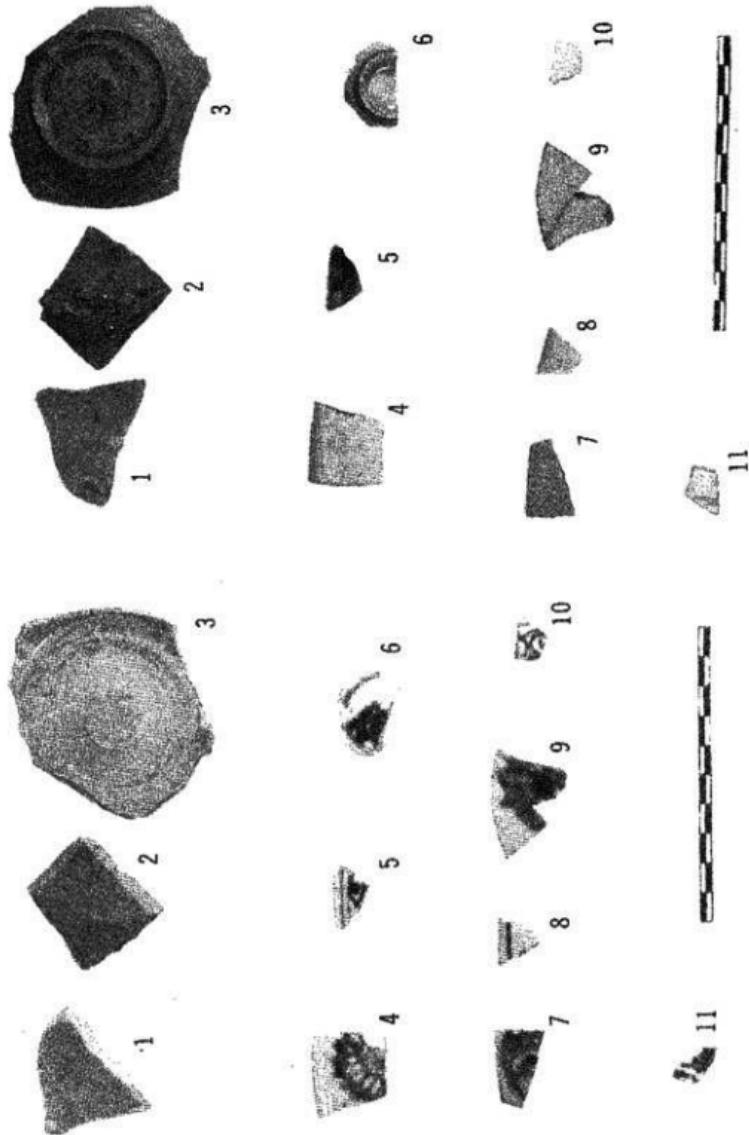
図版 11 青磁器



図版 12 白磁器・染付

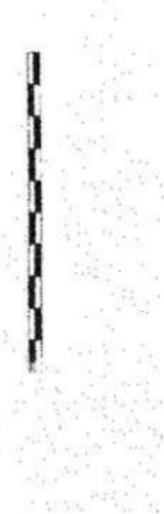
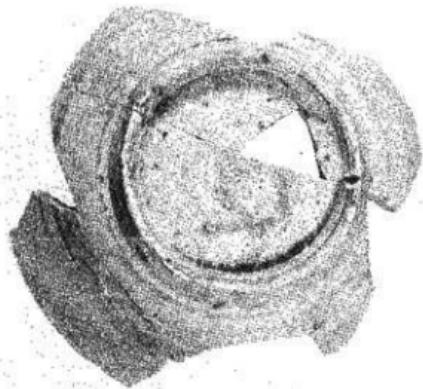
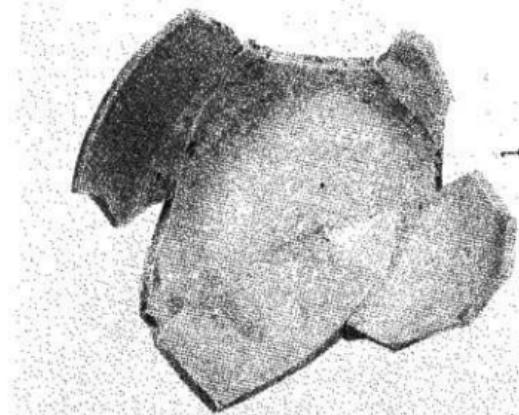


圖版 13 白磁器



圖版 14 白磁器 染付

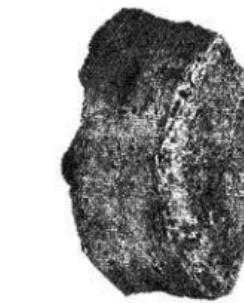
表

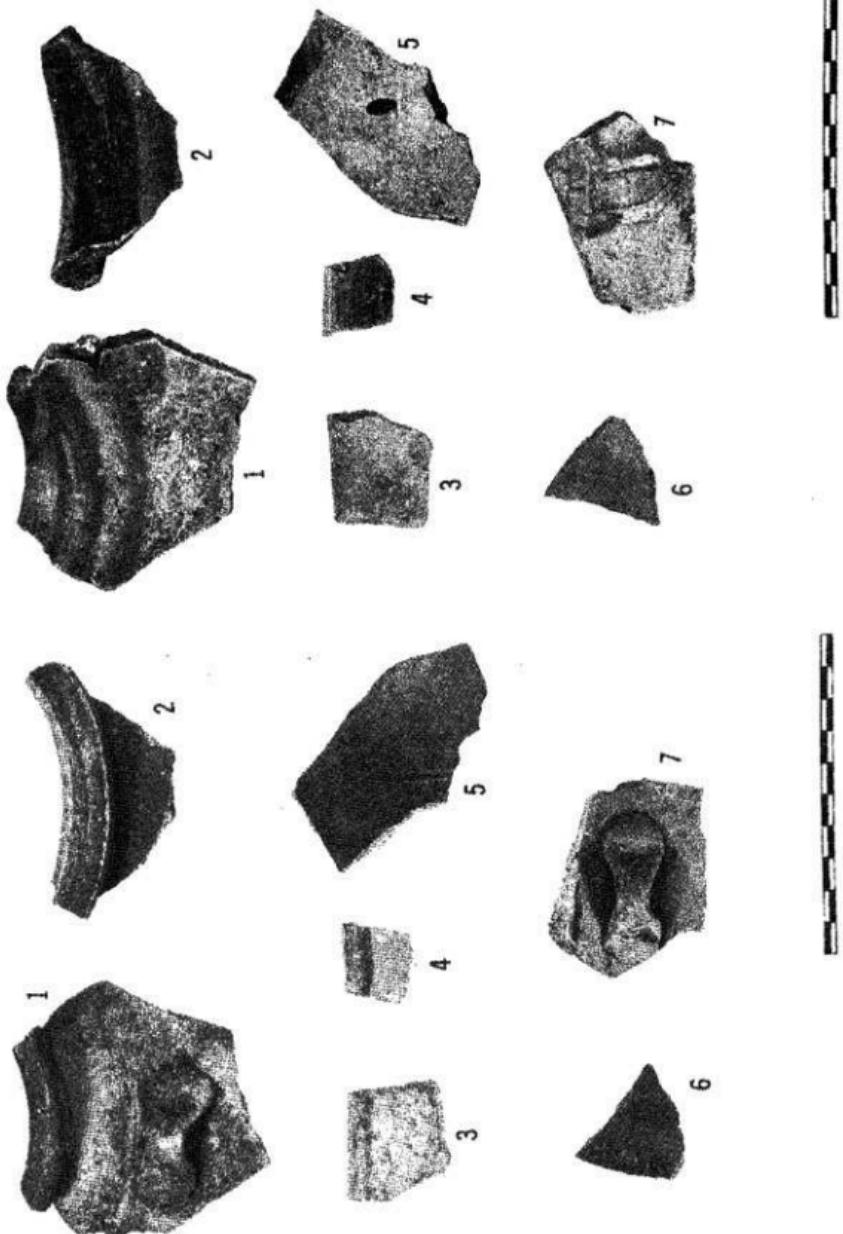


圖板 15 白瓷器

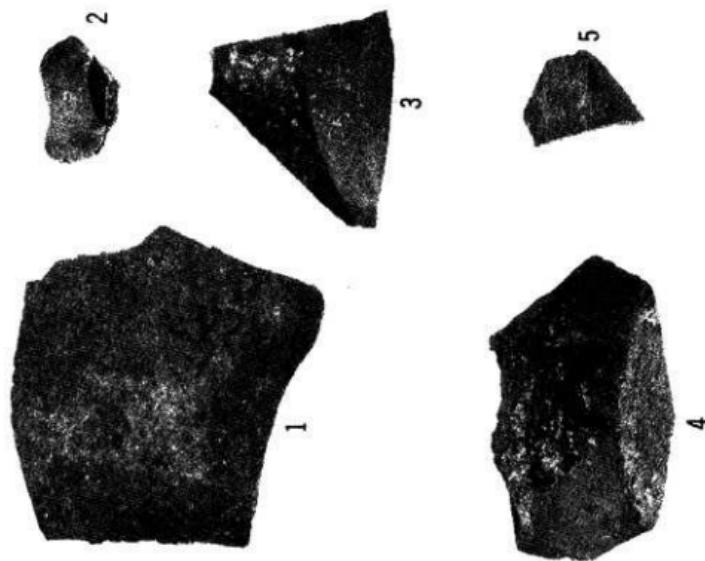
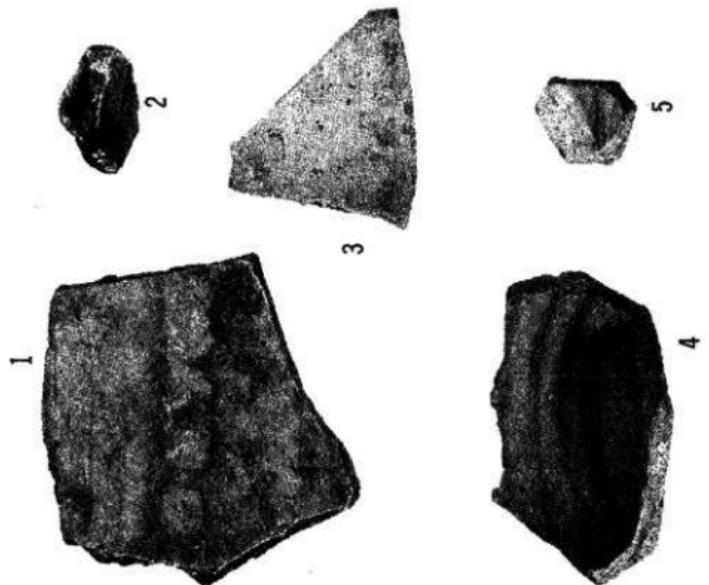


表

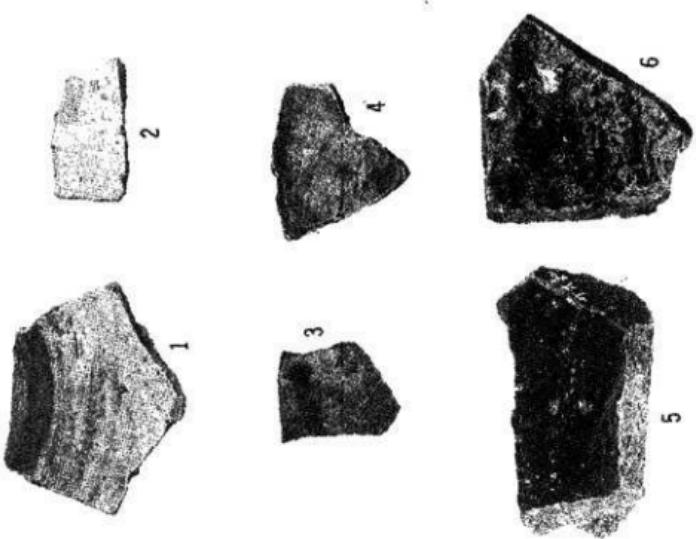




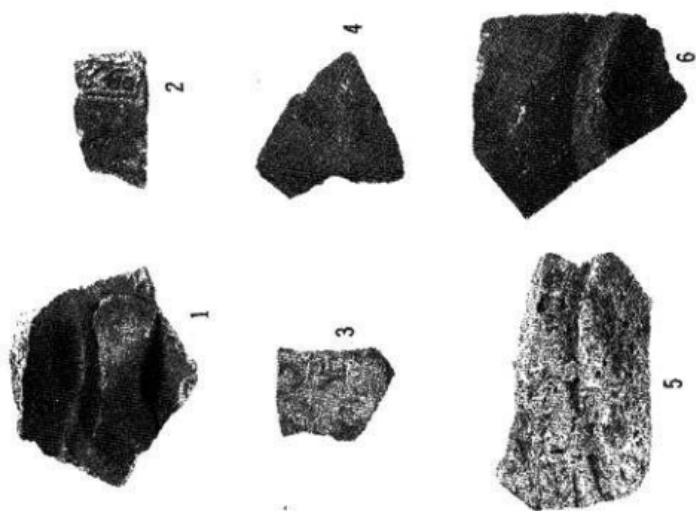
表



表



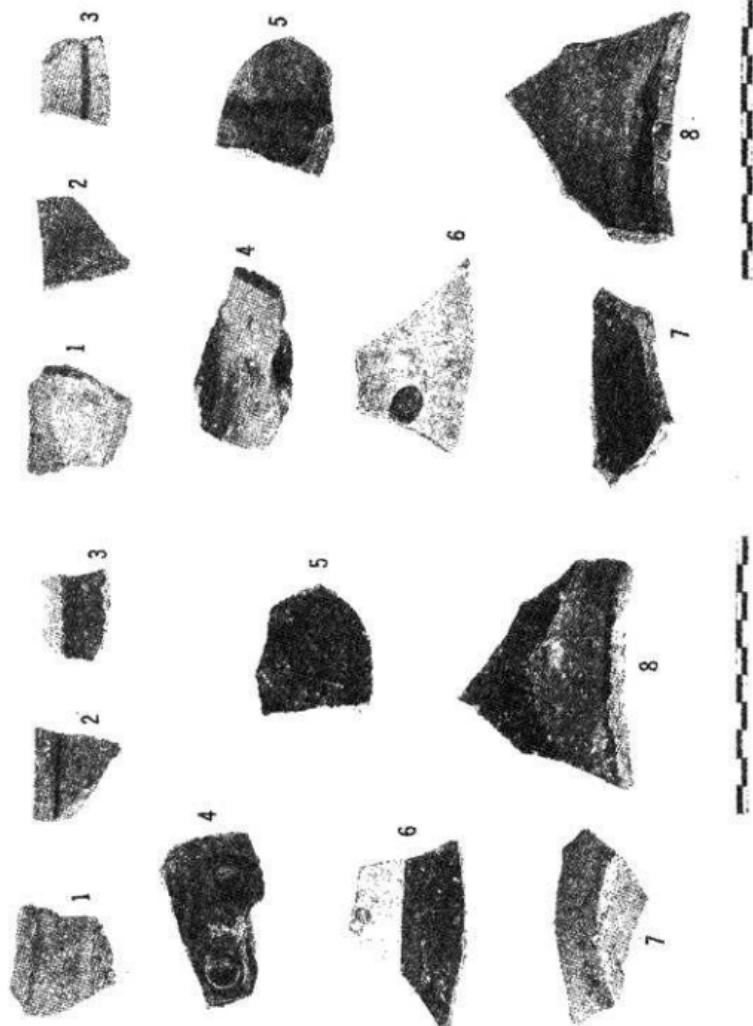
表



圖版 20 腳器

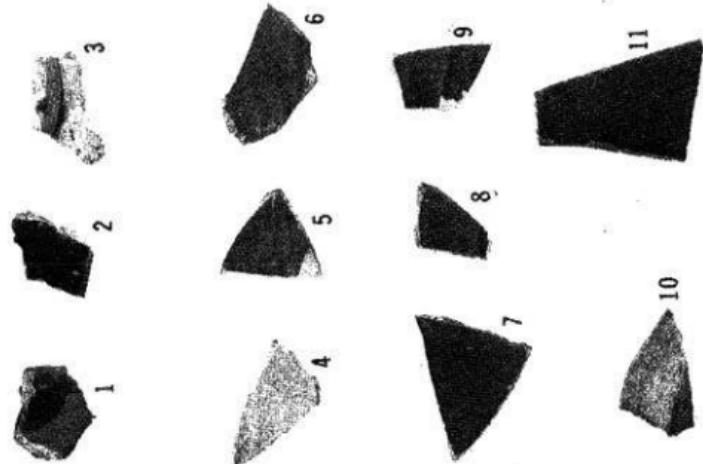
表

裏

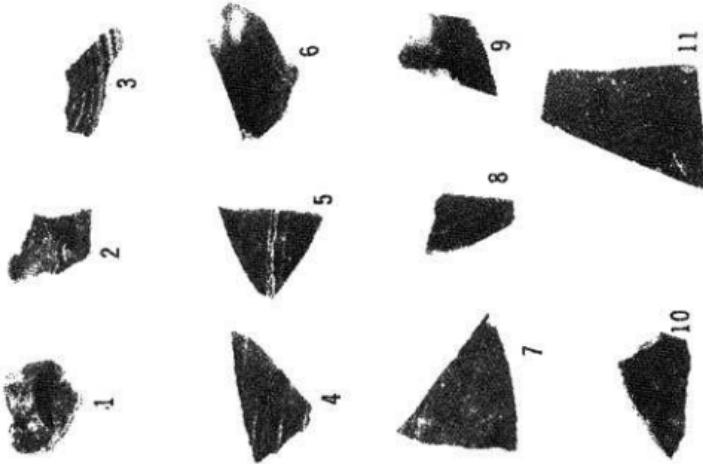


図版  
21 陶器

表

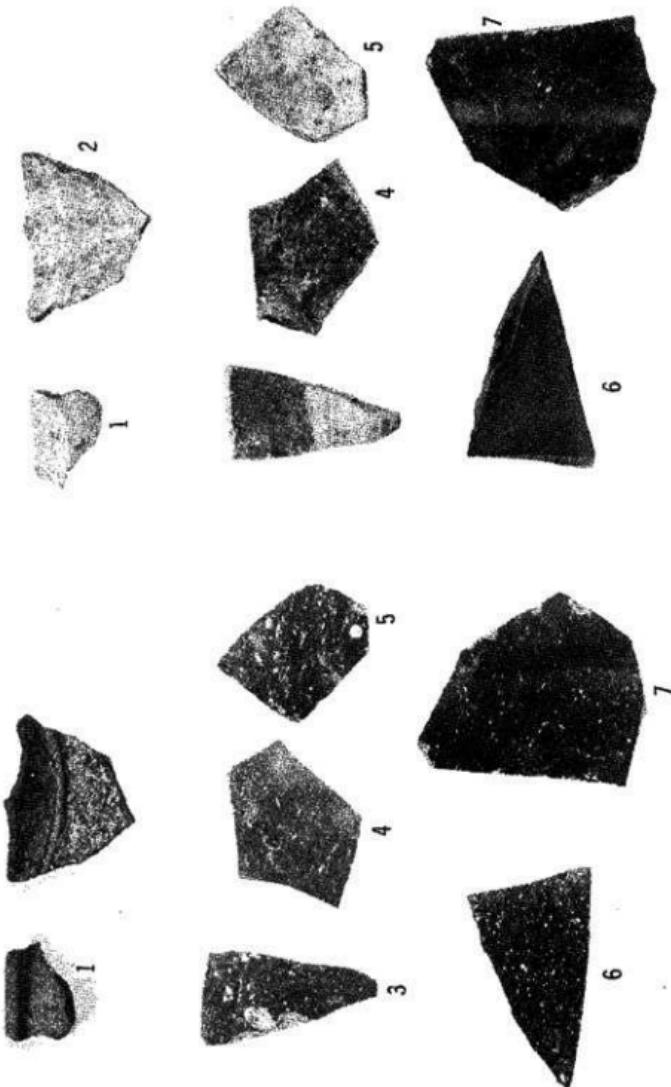


表



图版 22 胸器

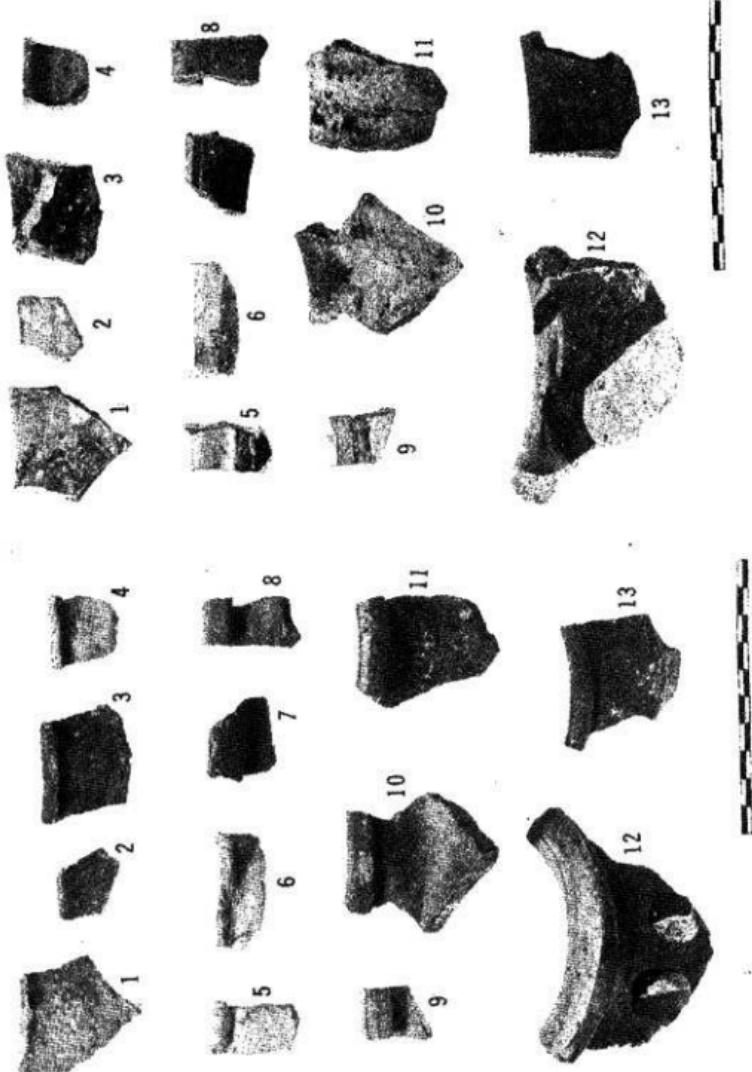
表



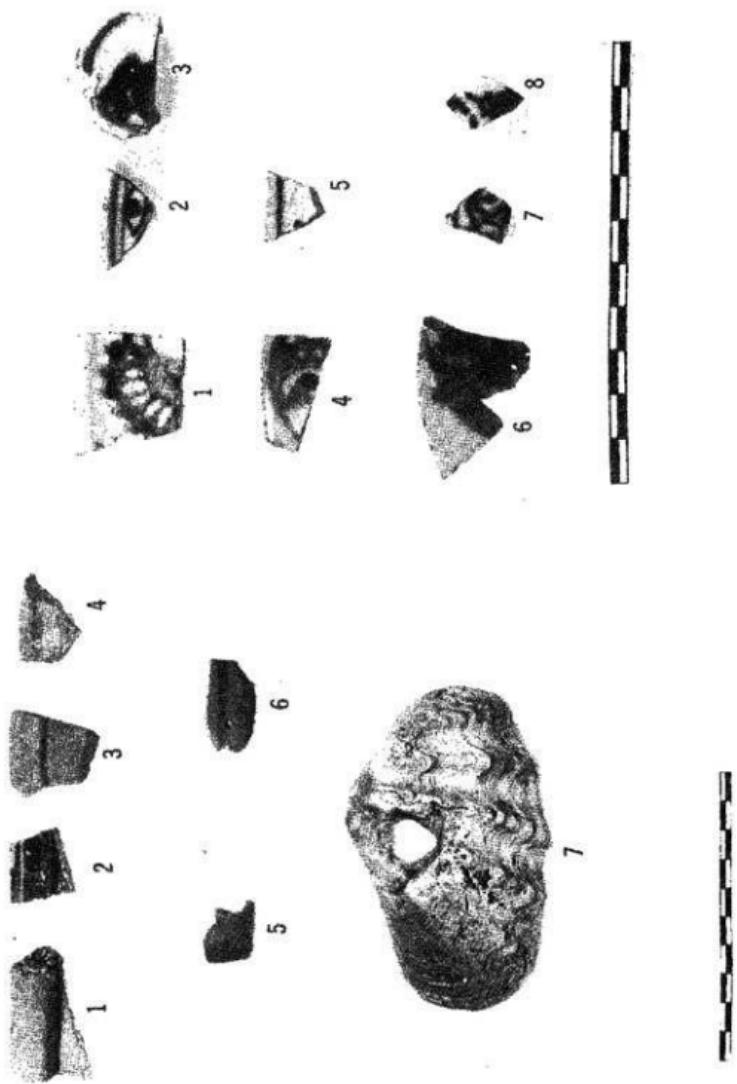
図版 23 腹器

表

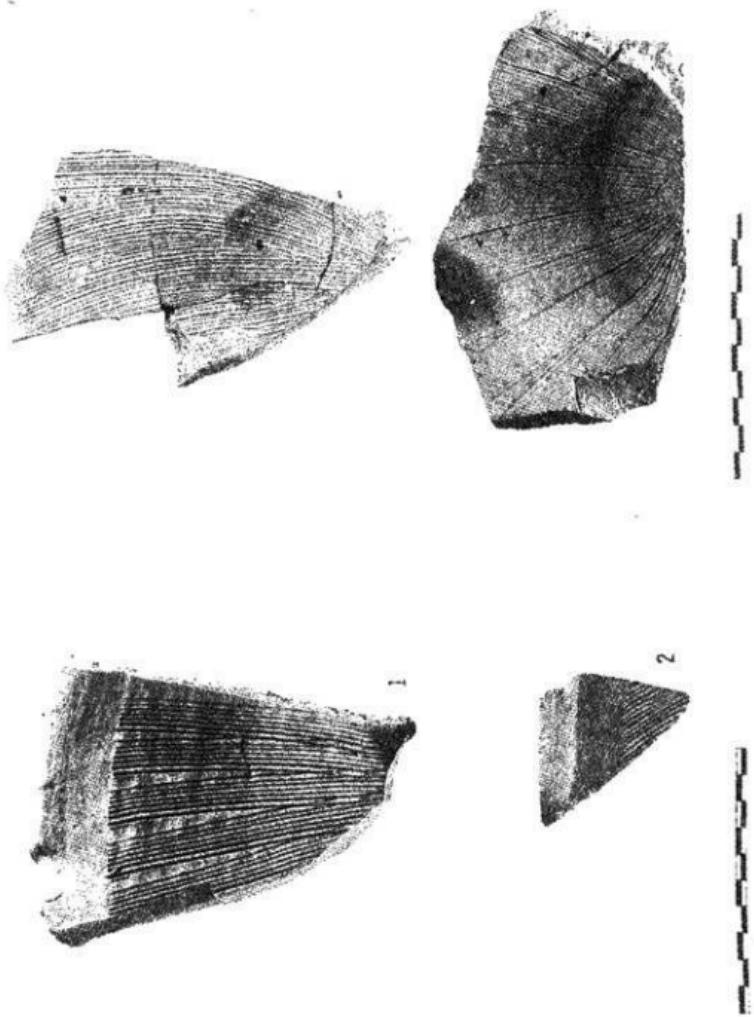
表



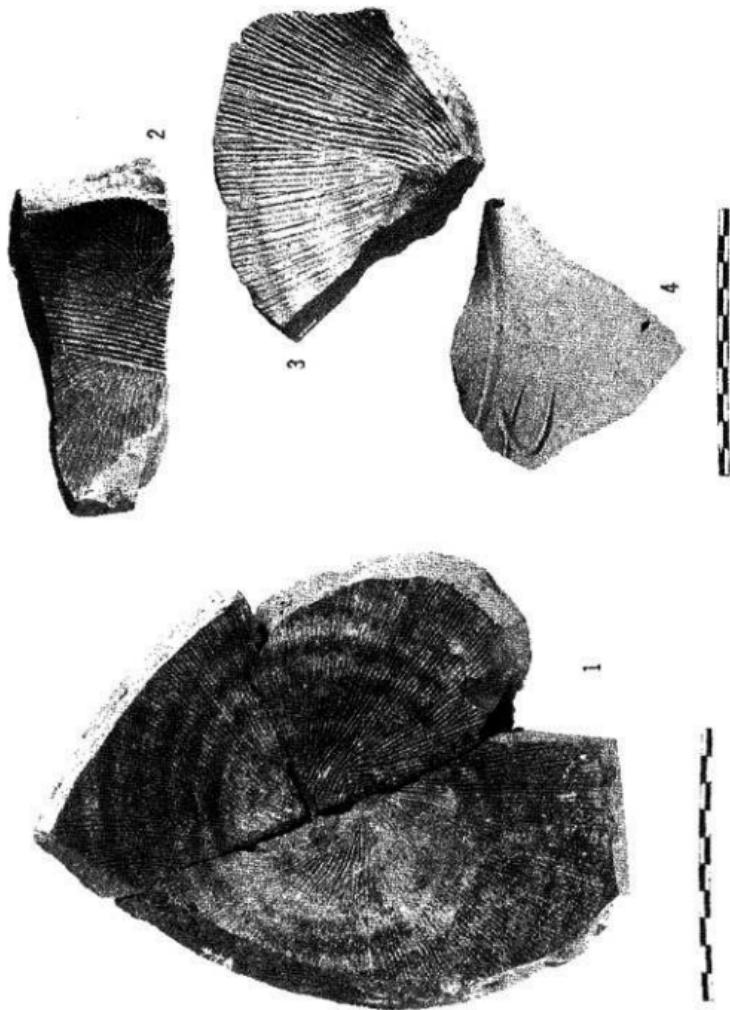
圖版 24 腹器



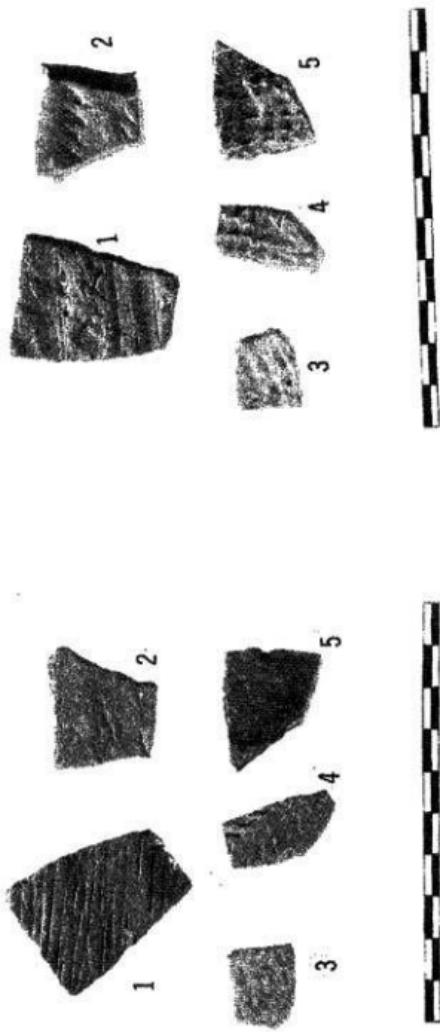
图版 25 胸器、貝製品、柆付



圖版 26 槩木

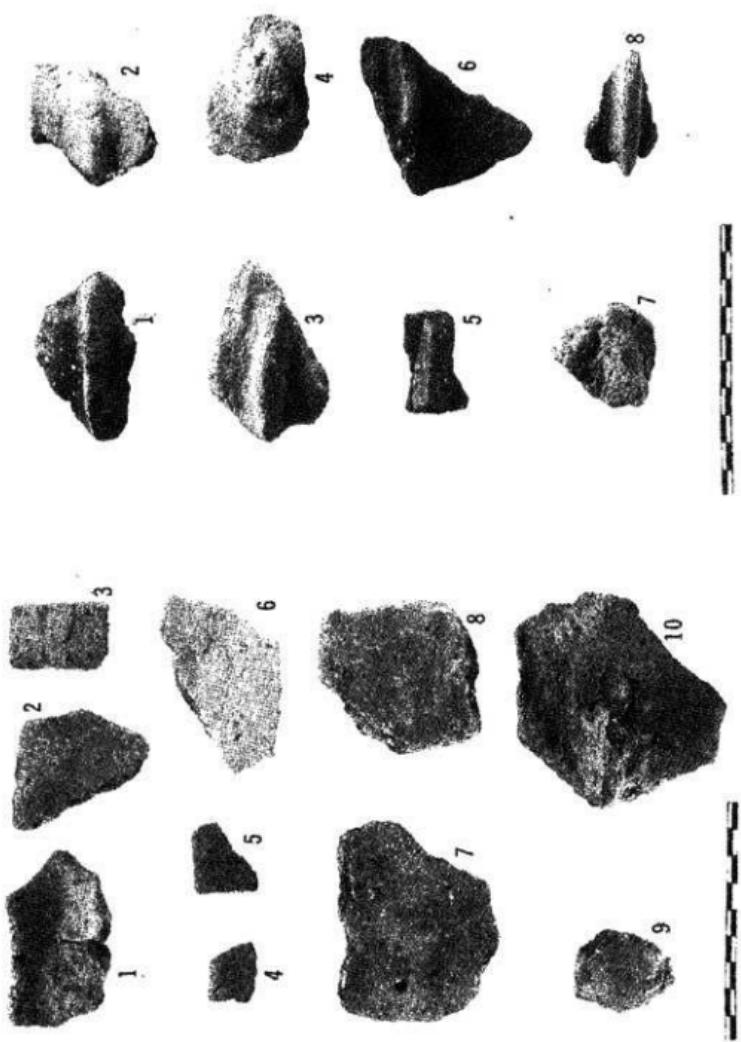


図版 27 胸器



圖版  
28

須惠器



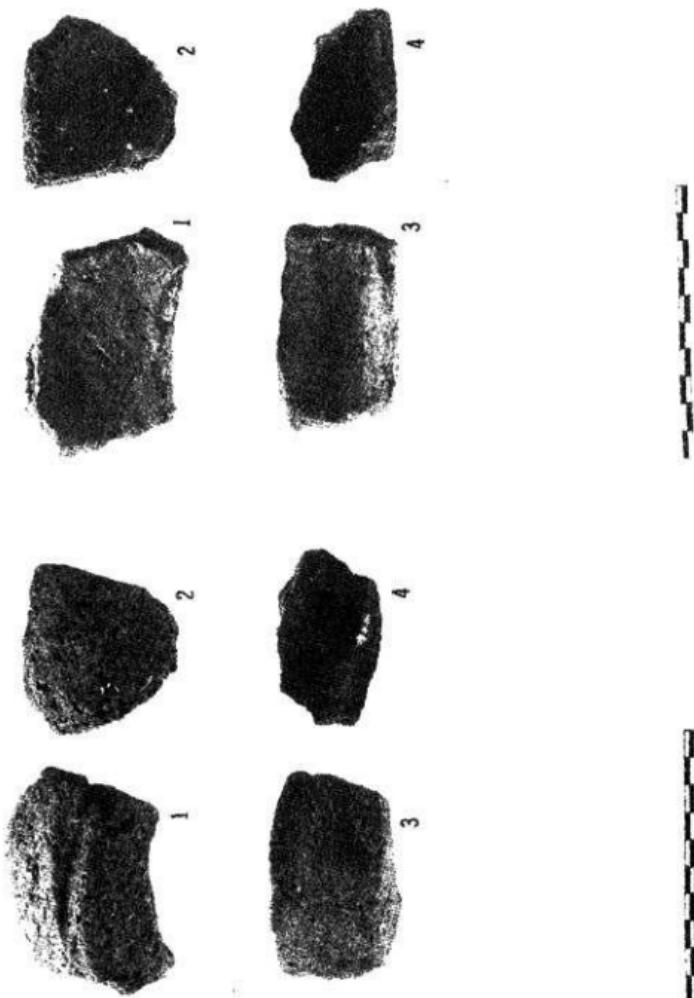
図版 29 土器

真

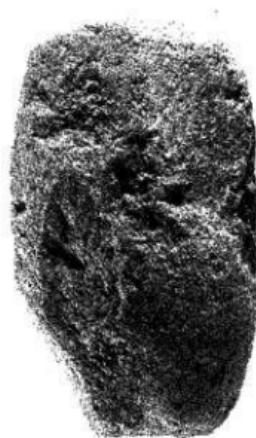
表



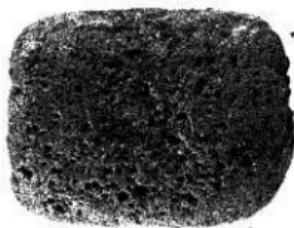
図版 30 土器



圖版 31 土器

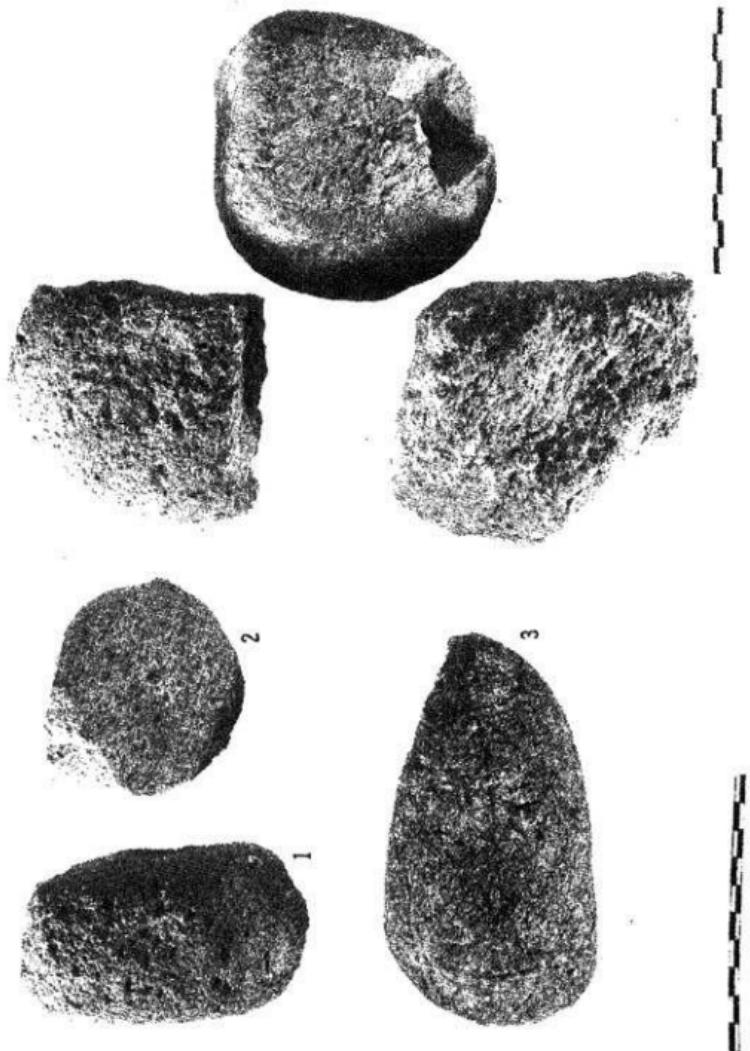


4



3

图版 32 石器



圖版 33 石器

付

## (付) 崖葬墓(洞穴囲い込み墓)

竿若東遺跡の西地区と東地区間の北側よりに平面形が南北にのびる橿円形を呈した、クレバス状の石灰岩凹地が存する。(図版34、上)

このフランバル、イーザーと伝承される凹地部分は調査前、雑草及び樹木がおい繁り、立ち入り調査が困難であったが、圃場整備にかかるブルドーザーの削平工事に伴ひ、石灰岩の半洞穴の状況が明らかになった。しかし、工事はさらに凹地の埋土作業へと進行していくため早急に当遺跡との関係を調べる必要性が生じ西地区の発掘調査に平行して概観調査を行なった。

長軸57m、短軸28mを測る石灰岩凹地内には水は認められなく、赤色のマーチ土が堆積していた。凹地の周縁は岩陰になり、4地点にて人骨が葬られているのを確認している。

しかし、ブルドーザーにより、すでに周縁に土を押し上げられてしまっていたため、調査不可能な箇所もみられた。

図版34写真での岩陰部は20~30cm台の石灰岩礫が集中した場所で、1個体の頭骨を認めたが、かなり土砂や伐採済の樹木がよせられ、その他の人骨の有無及び副葬品を確かめることは出来なかった。

図版34の下の、1地点から7~8m北側の岩陰部に、完全状態の牛骨を現位置のままで発見した。付近では、人為的造構は見出しえなかつた。

図版35の上、36の上は鍾乳石が発達してみられる半洞穴で、人骨と思われる長管骨1個を認めたが副葬品は発見することができなかつた。なお、岩肌にはスヌ状のものが附着し黒色を呈していた。

図版36の下は、石灰岩盤下の隙間を墓に利用したものとみられ、内部の高さは40~60cmをなしている。陶器甕は割れ、中の入骨は散乱していて、総個体数は明らかにしれないが、少なくとも2個体の頭骨は確認している。

図版37の上は、上記の墓と隣合うもので、ここでは図版37の下に示した完形のシズ甕を発見している。甕は合せ甕で、その接合は漆喰を用いたものであつた。

以上、簡単に崖葬墓を説明したが、これら以外にも土砂による破壊で消えさつたものもあるかと考えられる。

ところで、古墓内からは副葬品を発見することはできなかつたが、骨甕にされた陶器甕及び漆喰を使用されている点からみると、竿若東遺跡出土の陶磁器の主たる時期より、かなり下るものと考えられ、当遺跡との直接の関わりは薄いように思われる。

(上原 静)



石灰岩凹地の様相



図版 34

第 1 号墓



第二号墓



第三・四号墓



第二号墓、近景

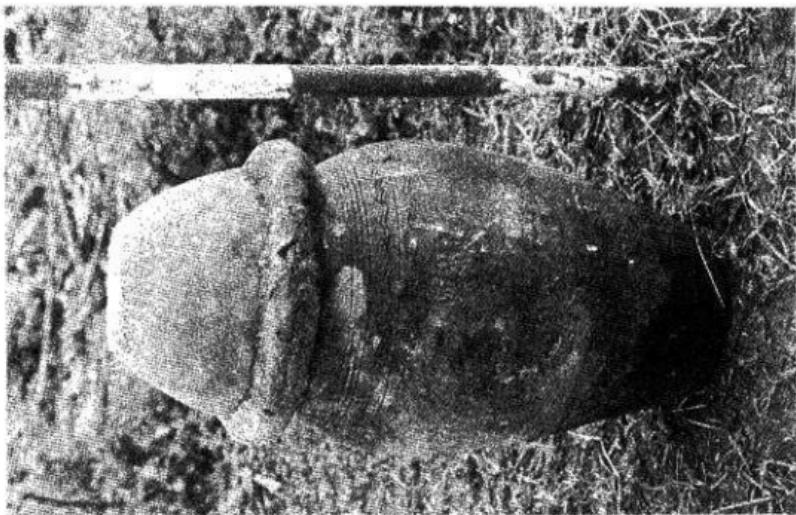


第三号墓、近景

图版 36



第四号墓近景



図版 37

第四号墓出土の喪棺

沖縄県文化財調査報告書第18集  
八重山、石垣島  
竿若東遺跡緊急発掘調査報告

沖縄県教育委員会  
那覇市旭町1番地  
0988-66-2731  
編　　集　沖縄県教育庁文化課  
発行期日　1978年3月31日

